
オレンジ

伊吹ノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジ

【Nコード】

N3700R

【作者名】

伊吹ノア

【あらすじ】

近くて遠い、幻想の世界、ユーライジア。人と似通いながらもその本質の異なる、魔精霊と呼ばれる者達が、人とともに息づく世界。その内の一人、フォル・ムーンウエル・琥珀は、イシユテイルと呼ばれる、大地の国ガイアットの王城で暮らす魔精霊の少女である。好奇心の強い猫のような少女だが、そのお腹に埋め込まれているオレンジ色の輝石が、人ならざるものを証明している。ある日フォルは、その輝石に自身の出生の秘密が隠されている事を知る。フォルは、自身に埋め込まれた秘密を解き明かそうと、日々奔走する。

手がかりは毎夜見る、誰かに殺されるといふ悪夢。そして、それ
れが異なる輝石を、異なる箇所に埋め込まれた、最後のイシュテイ
ルと呼ばれる仲間、姉妹の存在。同じ母から生まれ創られた彼女達
には、生まれながらにしての使命があった。それは、ケイ・ガイア
ットと呼ばれるガイアット王国の王子の、『パートナー』になるこ
とで……。このお話は、そんな彼女達の過酷な使命の、前哨戦な
物語。

第1話（前書き）

ついに10作品目、伊吹ノアです。

ツッコミどころ満載の不定期きまぐれ連載となります。

思いついたら、と言っざっくばらんな感じなので今までと比べる
と、

投稿間隔が長くなると思われますが、お話自体は長くはならない
と思いますので、

のんびりお付き合いいただけたらな、と思っております。

第1話

その日の朝は、彼女にとっていつもと違う目覚めだった。

何が違うのか、分からない自分に僅かな煩わしさを覚えつつ。

彼女、フォル・ムーンウエル・琥珀こはくは半覚醒のまま、
ガイアット王国の王族に並ぶ地位を表す橙一色の法服を手に取り、
半自動で夜着を脱いで……

ふと、その手を止める。

寝ぼけ眼の視線の先には。

少し日焼けした、細いだけが自慢のお腹に、埋め込まれたかのよう
うな、

縫い留められたかのような輝石が埋まっている。

光を反射して視界に入り込んでくる色は橙。オレンジ
材質は、希少の橙々を有したムーンストーンであり。
それこそがフォルそのものを示し表すものであった。

勿論、身体の一部に宝石が埋まっている以上、普通の人間ではな
い。

この世界、『ユーライジア』の源とも言われ、世界のどこかしこ
にも存在する、

十二の力を根源とした、魔の生命体、魔精霊と呼ばれるもので。

フォルは、その中でも『地』ガイアットの第三位に属する、『イシユテイル』
という名の種であった。

イシユテイル。

かの者は、地の第一位、根源魔精霊ガイアットがその礎を築き根を張り、棲まうと言われる場所、

ガイアット王国を中心に、昔からガイアット王国の人々と深く関わってきた魔精霊である。

一般的にその姿は人のものに酷似し、元来気性の荒いと言われる他の地の魔精霊とは違い、

穏やかで聡明、それでいて見目麗しい姿をしていたため、古くから人々に愛された代表的な魔精霊の一つでもあった。

だが、彼女らは。

その事実と対を成すように、遙か昔から戦乱の地であったガイアットにおいて、重要な戦力としても扱われていた。

何故ならば。

魔精霊であるが故に、人より頑健で魔力が高く。

魔精霊でありながら人の姿を取ることを常とし。

本来その他の魔精霊達にはなしえない、他属性の力を有することができたからである。

そんな彼女らは、ガイアットの駒として不当な扱いを受け続けたが。

決してガイアットの人々の元から離れることはなかった。

それは、何より彼女ら自身が、地の神の御許に棲まうその仔と呼ぶべきガイアットの人々を愛していたからだろう。

「今日もピカピカ、曇りなし、ですね」

フォルは、しばらく眺めていたお腹の輝石を一撫ですると、そのままさつと着替え、立ち上がって部屋を飛び出す。

まだ朝は早い、一度起きてしまえば眠気など忘れてしまつらしく、
フォルの、探検が好きな月を思わせる琥珀色の瞳は、生き生きとした光を放っていた。

そんなフォルがたった今飛び出した部屋は。
ガイアット王国の、王族だけが住むことを許された特区とも言える場所にある。

当然、調度品も豪華で、一人では大きすぎるその部屋は一国の姫君を扱うがごとくであり、

フォルが跳ねるように細長い廊下を進んでも足音一つしない赤の絨毯は、
高い格調を表す以上に、もし賊が侵入しても分からないのではな
いかと思わせるほどに柔らかくフォルを受け止めてくれた。

最も、ここまで侵入できるほどの賊ならば、
その者は賊などに身を糺す必要などないと言えるかもしれない。

昔とは違い、新しき王が就いてからは、戦いの匂いと言つべきものを失くしつつある城ではあるが。

今では過去のいくつもの辛酸を糧に、城下にはガイアットの民で構成された騎士団が、

この特区には生ける守り神と謳われる三人の王直属の近衛がいるのだ。

フォルに言わせれば彼らの許可を得ずに入れるものがあるならば是非見て見たいくらいだし、

裏を返せばフォル自身にしたってここから容易に出ることも叶わないと言えた。

そもそも何故フォルがこんな所に暮らしているのかと言うと。

フォル自身が文字通りガイアットの王族であると言つてもおかしくない身分だからだろう。

それは、フォルが前王であるレジャイラ・ガイアットによって生み出されたという純然たる事実によって証明される。

魔精霊は元々死と言う概念が薄い（寿命というものが原則的に存在しない）代わりに、

生の定義も曖昧であった。

その存在を維持するためには、世界の源である十二の力、魔力がある。

フォルはレジャイラの魔力と、ガイアットの一族（ガイアットそのものの末裔とも言われているが、正確にはガイアットに護られし

地に古くから住まい、支配する人々）のみに伝わる秘術によって生み出されたのだ。

その証こそが身体に埋め込まれた輝石であるのだが。

その秘術が詳しくはこういったものであり、何のためにその輝石があるのか、

フォルは知らなかった。

何度聞いても、秘密の一点張り。

それでも……それらの理由が分からなくても、

生まれて一年にも満たないフォルにはイシュテイルとして生きる目的がある。

それは一人前のイシュテイルになって、大地の仔と呼ばれる、勇敢で強いガイアット一族の「相方」^{パートナー}になることだった。

昔から強きガイアットの戦士には、優秀なイシュテイルの相方がいるのが慣例であったのだが。

今は戦乱の世も去り、ガイアットの一族はこの世界における、生けるものの安寧と、

死したものの健やかなる供養といった任を受け持っている。

相方と言えば、何かと危険の多いその仕事を補助するものこと
で。

イシュテイルにとって、ガイアットの一族の相方になることこそ
が第一の命題であると言えた。

しかし。

『ユーライジア・ステューデンツ』と呼ばれる世界の英雄たちにより世界の平和が保たれるようになり。

本来ガイアット一族の仕事は減ってきてしまった。

そうなってくると相方のいないものなど稀であり。

必要とされない道具が消えゆく運命にあるように、

イシュテイルも比例して自然とその数を減じるようになって。

今となつては、イシュテイルと言えばフォル自身、ごくごく身内の者たちしか知らなかった。

フォルと同じく、レジャイラによって生み出された、『最後のイシュテイル』と呼ばれる者達。

当時フォルたちを生み出すことにあたって、レジャイラ本人の身を削ることになると、

国ではそのことに対し反対する者も多かった。

身を削らせている当人のフォルたちにとっては耳の痛い話で。

現にレジャイラはフォル達を生み出し、その命を保つために創られたといわれる輝石精製の負担もあって、長く床に伏せて、遠国で療養が続けている。

もし、そんなフォルたちに与えられたレジャイラ自身の願いがなかったら、

自らの母とっていいレジャイラに多大なる負担をかけたこと、責めただろう。

それは。

「相方のいない、ひとりぼっちの子がいるの。そんな彼を幸せにできるのは、

きつとあなたたちだと思うから……」という言葉だ。

それは、母レジヤイラの心からの願い。

だから目指す。

その絶対無二の最後の一人、『ケイ・ガイアット』の支えになれるような一流のイシュテイルに。

同じ使命を持って生まれ、異なる輝石をその身に秘めた、姉妹とともに。

そんな最後の……夢を目指し生まれたイシュテイルたちのことを、人々は後に……こう呼んだ。

『テンダー・グリーン』と。

これは。

そんな幸せを与えるための戦いの火蓋が切って落とされる、少し前のお話。

(第2話につづく)

第2話

「むむっ、この声は……」

探索探検好きなフォルが、丸三日歩き回っても全てを回りきれないほど広いガイアットの居城。

その中を、好奇心を刺激する『あて』を求めてふらふらしている。

辿り付いたのは中庭へと続く吹き抜け。

大地の王国らしく、緑深いその場所から、澄みきった氷のような歌声が届いてきた。

フォルは、さながら猫のように耳を欹てる。

城と中庭を遮るものは、全て同じ形をしている白亜のアーチ柱のみで。

雨の多いこの季節、独特の涼しい風が、フォルの耳元に直接吹いてきていた。

フォルは、この季節が大好きだった。

自分が生まれたこの季節が。

その風に目を細めながら……頭のとっぺんで結わえた亜麻色のおさげ髪をゆらして、

歌の流れる発生源に向かって近付いていくと。

その歩くだけでにぎやかでかしましい雰囲気気づいたのだろう。

天に祈るように、瞳を閉じ……魔力溢れる言の葉を紡ぎ続けた人物が顔を上げた。

「……あら、フォルじゃない、おはよう。今日も早いのね」

「おはようです、ルリちゃん。ええとですね、あまりにも気持ちよさそうだったから、つい誘われてきちゃったみたいですよ。もしかして、今のつて音系サウンドの魔法ですか？」

世界を構成する十二の根源と同じくして、十二種の属性に分かれる魔法。

そのうちの一つ、風属性には、歌に似て非なる特別な魔法がある。くちびるに指をあてて、問うようにフォルがそう言う。

フォルよりもいくばくか年かさに見える、ルリ・ラピスラズリ・

瑠璃は、

ひんやりとした……それでいて心地よい空気を放ちながら、品のある笑みを浮かべて頷いてみせた。

「さすがはフォルね。実地で使うためにはまだまだなのだけれど、全ての魔法の中で最も効果範囲が広いつて言われる音系の魔法、使いこなせば便利でしょう？」

専門ではないけれど、もともと歌自体好きだし、習得できれば何よりケイ様のお役に立ってるんじゃないかって思ったのよ」

初めは不敵に、後半は何か酔うように。

フォルはそんなルリを見て、色々な意味合いを込めて感嘆の吐息をついた。

「うむむう。努力家ですね。ルリちゃんは。フォルも見習いたいです」

ルリは、フォルと同じ、レジャイラによって生み出されたイッシュテイルの一人だ。

その名が示す通りに、額の中央部分には藍色の光放つ輝石がはめ込まれており、

凜とした佇まいと気高さ、いるだけでにじみ出るような……美を窺わせている。

フォルが尊敬の眼差しで見上げそう言うのは。

ルリが後に、『テンダー・グリーン』と呼ばれる最後のイシュテイルの中で、

一番初めに生まれた人物であり、尚且つフォルがいまだかつて会ったことも話したこともなく、

それでも会い焦がれて止まない……パートナーのいない最後のガイアットの一族、

『ケイ・ガイアット』と面識があるという優位性ゆえであろう。

「そうかしら？　好きでやってることだから、そこまで大げさなことしてるわけじゃないわよ？

お仕事の合間の暇つぶしみたいなものなんだから」

そう言っつてルリが肩をすくめると。

輝石を中心に分け隔てられた、両肩にかかるくらいの長く碧い髪の一房が揺れる。

「好き、ですか。いいなあ。フォルもケイさまに会いたいです。

あ、そうだ。ルリちゃん、ケイさまのこと何かお話してください」

フォルが羨ましそうに猫目をしばたかせ思いついたように小首を傾げると、

ルリはそれを見てちよつと苦笑して、それからすました様子でそ

れに答えてみせる。

「そうねえ。話してあげたいのはやまやまんだけど、フォルには会うたびに聞かせてるじゃない。」

いくら私だって毎度話題を提供できるほど多くはケイ様のこと知ってるわけじゃないのよね。悔しいけど」

「それはそうなのですけど。同じ事でも聴く時が違えば、新しい何かが分かるかもしれないでしょう？ 行方不明になってるケイさまが、今どこにいるのか手掛りが掴めるかもしれないのです」

「……まあ、気持ちは分からなくてもないけれど」

フォルにそう言われ、何かを考え込むように視線を足元に落とすルリ。

フォルたちが理屈ではなく、生まれた時から備わっている感情。

それは、『ケイ・ガイアット』を思い慕う気持ち。

だが、フォルたちはそんな『ケイ』なる人物のこと、知っていることはそれほど多くなかった。

その名前と、世界に平和をもたらした『ステューデンツ』の一員であること、

現ガイアット王の実兄であること、

そして……一年以上前に忽然とその姿をくらましている、ということのみ。

だからこそなのか、フォルは持ち前の好奇心探究心の旺盛さも手伝ってか、

そんな『ケイ』の行方を探し求めることを日課としていた。

今のところそれは然したる成果をあげられなかったため、
とにかく何でもいいから『ケイ』の情報欲しかったのだ。

と、そんなフォルの内にある真摯な気持ちが届いたのだろうか。
ふっとルリは顔を上げ……語りかけるように言葉を紡いだ。

「ケイ様の居場所につながるものかどうかは分からないけれど、
私たち最後のイシュテイルと呼ばれるものたちには、家族とかそ
ういった表向きなつながりとは別に、共通する部分があるってこと、
フォルも知ってるわよね？」

「……はいです」

それは言わなくても互いに理解している、連帯感のようなものだ
ろうか。

一つは、名を示す輝石の存在。

二つ目はレジヤイラに託された使命。

そして三つ目は。

眠りにつけば時折垣間見る、内容こそ違えど根本的な意味合いは
同じ側面を持つ、

悪夢の存在である。

毎日見るわけではないが、見れば必ず殺される……そんな悪夢だ。

そこでフォルは、ルリの言葉に頷いて答えてから、
そういえば今日は悪夢を見なかったことを思い出した。

変わりに見たのは、オレンジ色に染まる悲しくて……だけど優し

く暖かい夢。

「あ、そだ。それで思い出したです。今日はいつもの怖い夢じゃなかったのです」

「……そうなの？ 一体どんな夢だった？」

思い出したままにフォルがそう言つと、それこそが重要だと言わんばかりにルリはそう聞き返す。

「えつと……んと、あつたかくて、オレンジ色が一杯で、霧みたいな雨が降つてて……あ、あれね？」

何か肝心なこと忘れてる気がするです……」

その夢には誰かがいたはずで、何かをしてくれたはずなのに。

その部分に霞みがかかったように思い出せない。

フォルが頭を抱えて唸っていると、代わりにルリが口を開いた。

「そう、フォルも思い出し始めてるのね」

「……思い出す？ 何をですか？」

再びフォルが首を傾げると、ルリは間を開けるように一拍おいて言葉を続ける。

「これは、ね。あくまで私の推論として聞いてほしいんだけど、私たち一人一人に輝石があるように、私たちはきつと一人一人が、ケイ様に対しての思い出を持っているはずなの。

悪夢も、そうじゃないあたたい夢も、つまりはその断片で……フォルが求めているものは、きつとフォル自身の中にあるって、

そう思うわ」

悪夢の事はあまり考えたくはないけれど。

そう言われてみれば今日の夢は、ルリの言う通り、

『ケイ』の記憶がこぼれ出たのかもしれないって、

そういう気分になってくるフォルである。

それが果たして、『ケイ』の居場所の手掛りとなるのかどうかは分からなかったが。

それよりも、フォルにはルリが一人一人にある思い出、と言い切ったのが気になった。

「それってルリちゃんには、ルリちゃんだけのケイさま情報があるってこと？ 他のコにも？」

それは是非知りたいです。教えてくださいですっ」

「うーん、それは……きっぱりいやよって言うておこづかしら」

それは初耳だと、何で今まで教えてくれなかったのかと勢いこんでくるフォルに。

ルリはにべもなく邪気のない笑顔見せてくる。

「うう〜。ルリちゃん、いけてない、いけてないですう〜」

「ぐさっ。って、言葉の使い方間違っただけじゃないそれ？ 私はいつでも十分イケてるつもりなんですけど。」

と、まあ。それは置いておくことにして。私からふっというてなんだけど、これは私の一番の秘密だったりするのよね。きつといつかは話す時が来るんでしょうけど、まずは人のよりフォル自身の思い出を掘り起こすことから始めるのね。そうすれば私が秘匿してる理由も分かると思うから……」

ルリはそう言い切ったが最後、がんばなさいとエールを送りつつ、急に用事ができたと言わんばかりにその場を去って行ってしまった。

そんなルリは、行方不明になっている『ケイ』に対し、会えない寂しさみたいなものはあるものの、

それほど危機感を感じていないようにも見えた。

ようは、信じて待っているという一言に尽きるのだろうが。

「結局、探したければ自分で探せてことなのですかね……」

それはそうかもしれないですけど、フォルはちょっぴりいじけたようにそんな呟きを漏らす。

ただどすぐに……このままここにいてもしょうがないと気づき、フォルは再び探索という名の趣味をもちかねた暇つぶしを開始したのだった……。

(第3話につづく)

第3話

ここはお城なのだから、抜け道や隠し通路があるはずですよ。そんな事を考えつつ、フォルが同じイッシュユテイルの悪友とも言うべき存在であるルビスからもらった『セザール光』属性のマジックアイテム、『ミオラーペ』で地面の赤絨毯の縫い目が見えるほどに覗き込みながら屈みつつフォルが歩いていると。

「フォルちゃん、おはよーっ！」

天井が突き抜け花が咲くような声がして、フォルはびっくりして顔を上げた。

するとそこには動く花束……ではなく、網目の籠に大量の魔法花を掲げながら持ち運んでいる人物の姿が目に入った。

フォルと同じレジヤイラによって生み出されたイッシュユテイルの一人で、

名前はガーネット・グロウシュ・柘榴。

見た目の年齢がごく近いことも含めてウマがあうのか、フォルと仲の良い人物の一人である。

「おはよう。ガーネットちゃん。お花の配達ですか？」

気づけば城下の町に程近い、お城の真ん中をぶち抜くホールに出
ていたフォルは、

なんだか急いでいる風のガーネットにそんな問いかけをする。

「うんっ、ちよつとルースちゃんのところにお届けものなの」

嬉しそうなその様子だとガーネットがやはり外に出るらしい。

ちなみにルースことルース・アメージス・紫水も同じく同年代の
イシュテイルの一人で、

主に城下で働いている。

基本的に王族という立場にいるフォルたちは、用がなければ城下
に出る事は許されないのだが、

それぞれに与えられた仕事を行う際にはその限りではない。

これから外に出るガーネットのことをフォルは少しうらやましく
思ったが、

会話をしつつも足を止めようとしないガーネットを見ると、
急いでいるのかなと考えるのは当然のこと、フォルはこの時、声
をかけるべきではなかったのかもしれないと内心思っていた。

「あつ、ごめんね。急いでるからお話はまた後……きゃうんっ！
」？

「う、思ったそばから……」

何故ならばフォルにはその瞬間、今日の前に起こっている惨状が
そのまま想像できてしまったからである。

籠はひっくり返し、花は赤の絨毯を一層際立たせ、ガーネットは
その中心で眠れる姫のように？ 突っ伏していた。

「大丈夫ですか？ ガーネットちゃん。ごめんです」
「どうして？ フォルちゃんが謝るの？」

転び慣れているせいなのか、照れ笑いして何事もなかったように立ち上がるガーネット。

やるだろうなと思っていたことが本当になってしまい、
ちょっといたたまれなくなってすぐにフォルは駆け寄ると。

フォルよりも一層深い……おかつぱの薔薇のような赤い髪の見
に見かねた乱れを整えてあげつつ、気づけばそう謝っていた。

すると、案の定ガーネットは不思議そうに小首を傾げてそう返す。

「え、ええとですね。フォルは『トリアルメーカー厄介者』だから、

ガーネットちゃんはその被害にあってしまったのです。だからで
すよ」

どこまでも純粹に見つめられる紅髓玉カーネリアンの瞳に、

フォルは思っていたことをそのまま言うわけにもいかず、
代わりに思いついたままのことを口にする。

「え？ ちがうよ。フォルちゃんのせいじゃないよ。ガーネが
わるいの。」

って、あわわ。お花拾わなきゃ、痛んじやう」

「あ、フォルも手伝うです」

苦笑するガーネットに、何と言うべきか迷ったフォルであったが、
すぐに目の前の惨状に気づいたガーネットが一束一束を愛しむよ
うに拾い始めたのを見て、

フォルも慌ててその手伝いをした。

結果的にお互いを庇うする形になったが、フォルが言ったことはあながちでまかせでもない。

たとえば、ガイアット一族の相方を目指すイシュテイルとして、王族近衛の最強の三騎士のもと、野外での実践演習などをするところがあるのだが。

どうもフォルはその度にいらぬ厄介ごとを連れ込んでしまっていたのだ。

その度合いと言えば三騎士の中で最も真面目で面倒見のいいユタですら、

『フォルがいると命がいくらあっても足りないでござる』と呆れられてしまうほどで。

ガーネットのドジが、もう骨の髄まで染み付いてしまっているように。

フォルが起きた厄介ごと＝自分のせいと誤ってしまつのは仕方がないことなのかもしれない。

第4話

と……。

フォルが自身に対し苦笑を浮かべつつ、一緒になって花たちを集めていた時だ。

「むむっ、これはっ」

「……フォルちゃん、どうかしたの？」

「え？ あ、ほ、ほら。ここに青虫さんがいるですよ？」

一瞬だけなにやら複雑な表情をするフォル。

当然それに気づいたガーネットに対し、フォルは今度は慌てたように、

取り繕うようにそんな事を言った。

「あ、これってちようちよさんになる虫さんだよ。後でお庭のほうに移しておくね」

何か別のことに気をとられているのが見え見えのフォルであったが、

ガーネットはそれに気づかなかっただけらしい。

「手伝ってくれてありがとう、フォルちゃん。それじゃガーネ、もう行くから」

「あ、はいです」

だからフォルが、なんだか申し訳ない気持ちになっていると。ガーネットは律儀にぺこりと頭を下げた後、

そのまま城門のほうに向かって駆けていってしまった。

何と云うか、その純粹さの塊のようなガーネットの後ろ姿を生返事で見送るフォル。

その内では、ああ見えていざという時は誰よりも強さを発揮する燃え盛る炎のような子なのだからわからないものですと、勝手に評価なんぞしつつ。

それからしばらく待つて、

フォルは辺りに誰もいないことを確認すると、
ぱつとしゃがみ込んで……赤絨毯をじいっと『ミオラーペ』で覗き込んだ。

すると僅かに線でも引かれるように、絨毯がへこんでいるのが分かった。

さつき花を拾っていて声をあげたのはもちろんこれのことだ。
フォルはもう一度辺りを確認し、ちよつとだけ絨毯をめくってみる。

そこに見えるのは、煉瓦状につながる木製の地面で、
フォルの思っていた通り、その地面には、人がそのまま立てそうな範囲の四角形をした裂け目が見えた。

「やっぱり、隠し階段発見ですっ」

フォルは嬉々としてそう呟き、その隙間に指をかけ、少しだけ爪

を伸ばす。

それからむむう、と力をこめると、たいした抵抗もなく地面は一辺をのぞいて持ち上がった。

その向こうに見えるのは、石でできた地下へと続く階段だ。

「……こういう時ばかりは、自分の体質に感謝ですね」

巧妙というほどでもないが、隠してあったのだから黙って入ってはいけないような場所なのかもしれない。

下手すると『おしおき』を受ける可能性もある。

「否、おしおきが怖くて探検なんてやってられないですっ」

どうせ怒られるのならば自分一人のほうがいいだろう。

そう思ってガーネットには本当の事を言わなかったわけなのだが。

それでも持ち前前の探究心が全面に押し出されて、

その辺りの面倒は意識的に頭の隅においやることにしたフォールは。

再び外敵を警戒する小動物のように首を伸ばして、誰もいないことを確認すると、

そのまま石の階段を、慎重に慎重に下っていく。

しばらくすると、階段は急激に曲がっていて。

そつと覗き込むと、その先には行き止まりがあった。

「ん？ あんなところに扉があります。何の部屋でしょう？」

いや、正確には行き止まりではなく、通路を塞ぐように何やら不思議な輝きを放つ鉱石でできた扉がそこにある。

フォルがその光に惹かれるように近付いてよくよく観察してみると、

その扉にはノブのようなものが一つもないことが分かった。

だが、それは確かに扉であると、そういった確信があつて。

「これはもしかや……って、うわわわあっ」

目の前のものが、遠く離れた場所と場所をつなぐ『トラベルゲート虹泉』と呼ばれる大型のマジックアイテムかもしれないと思いついたその瞬間。

触れかけた手がいきなりぐんと引つ張られる。

驚きの声をあげたフォルは、何の抵抗もなく扉をすり抜け、反対側に吐き出されて、床に投げ出された。

「いたたたた」

柔らかい絨毯でなければかなりあつたかもしれない衝撃にフォルが目を回している。

ふいにフォルの頭上に人影が差す。

ん？　と思つてフォルが顔を上げると、そこには知らない子がいた。

見た目で言えば、フォルより少し下くらいだろうか。

まず目立つのが強めのカールが掛かった青銀色の髪と、なんだか眠たげな檸檬色の瞳。

そして、その小さな手の甲には、フォルと同じレジャイラによって生み出された最後のイシュテイルを表す黄色の輝石があった。

「フォルちゃん、大丈夫？」

「え？　あ、はいです。どうもありがとうございます」

フォルは自分を知っているらしいことに驚きつつも、差し出された真雪のような手のひらを掴み、

立ち上がる。その間に、この子はだれでしたっけ？　と考えて、すぐにその答えは出た。

同世代の、レジャイラの子として生まれたイシュテイルの中で、フォルが会ったことがなかったのは一人しかいなかった。

レジャイラによつて最後に生み出されたもの、シトリー・トパーディア・玉滴。

その身に秘めた魔力は強大で、自らではその力を抑えることができず、

嚴重な結界の張られた部屋から出られないでいると、聞かされていた。

「んーと、もしかしてシトリーちゃんですか？ フォルのことは知ってるみたいですけど、

初めましてでいいんですね？」

「はい。初めまして、です。でも、フォルちゃんのこととは知っていません。風さんが教えてくれたから」

ヴァーレスト

窺うように思い出すように、唇に手を添え問いかけるフォル。

それを受けたシトリーは、歌っているかのような口ぶりですんなり事を言う。

こんな地下の部屋で風を感じることができのだろうかと、何となくフォルが辺りを見回してみると。

その場所が、フォルの部屋と同じような豪華な個室であることや、天井近くにある、これまた不思議な、日溜りのような輝きを放つ空気口のようなものが目に入った。

シトリーの言う風とは、おそらくそこから流れてくるのだろうか。フォルにはその風を感じ取ることはできない。

逆に言えばほとんど分からないくらいの微細な風から、多くの事を知りえ、感じられるほどに強大な力を持っている、ということになる。

これで力が抑えられているのだとしたら。

シトリーがここから出られないというのも分かる気がするフォルである。

魔力を自らで制御できないのならば。
その力でシトリー自身をも傷付けてしまっだらうからだ。

(第5話につづく)

第5話

フォルが目の前にいる閉じ込められし少女についてうむうむ考え
ていると。

少女……シトリイが何やら嬉しそうに、興味深そうにその大きな
瞳でじいっとフォルの事を見ているのに気づく。

「むむ、そんなじつ見つめられるとフォル、照れちゃうです」

「あ、ごめんなさい。フォルちゃんのこととは知っていたけど、

他のイシュテイルさんたちに会ったの、シトリイ初めてだったから。
その、なんだか嬉しくて」

はにかんだような笑顔を見せるシトリイに、思わずつられてなん
だかこそばゆい気持ちになるフォル。

レジャイラによって生み出されたイシュテイルは、いずれたった
一つの席を争う間柄になるだろう事は聞かされているが、そう言わ
れればフォルも悪い気持ちはしなかった。

過去よりも未来よりも、今を考えていきたいから。

同じ仲間として、家族として、仲良くしていきたいとフォルは思
う。

「そうですかー。シトリーちゃんに会うのフォルが一番なんですね。あれ？」

でも、ずっと一人ってわけじゃないですよね？」

シトリーがここを出られないのなら、誰か他の人にお世話してもらわなくてはならないはずだった。そう思っただけでフォルが何気にその問いかけると、シトリーは淡く微笑んでそれに答える。

「はい。いつもは 그레이さまがシトリーのお世話をしてくださいます」

「ええっ、 그레이さま？ ガイアット三騎士の一人の？」

ユタさまとか、パールさまとかなら分かる気がするんですけど」

ガイアット王国最強の三騎士の一人、 그레이・ミアソローラは、他の真面目で厳しく、

それでいて優しく見守ってくれているような他の二人と違い、

自由奔放の壁を容易く突き破ってる破天荒な人で。

とても甲斐甲斐しく人のお世話をするような人物には見えないのだが。

「ん〜ワタシのこと、 よ、ん、だ？」

「っ、 にぎやあっ！ お、 おおお化けですっ」

そんなフォルの心の内を、見透かしたかのようにいきなり目前の煉瓦の壁からゆっとな腕が飛び出し、引き続きらんと光る瞳が自己を主張し、ざんばらに流れる長い灰色の髪が、壁から次々と生

えだしたかのように出現したからたまらない。

泡を吹きかねない勢いで尻餅をつきながらフォルがシトリイにしがみついて震えていると。

そこに、カラカラと笑い声が降ってきた。

「にははははっ、面白かった？ 面白かった？」

「ぐ、グレイさま？ むうう。おどかさないでほしいです」

泣き言を漏らしながら瞬きしてフォルが顔を上げると。

先程のおどろおどろしい雰囲気はどこへやら、紫紺色をした法服にとんがり帽子と黒マントいった、騎士というよりは魔法使いに見えるくもない姿のグレイが満面の笑顔でそこにいた。

「おはようございます。グレイさま」

「ういっ、おはよーっ。シトリっち、今日も元気そっで何よりだよ。

フォルっちも相変わらず良い顔するね！」

ゆっくりとしたシトリイの挨拶に、グレイは朗らかにそう返してみせた後、

更に笑みの度合いを深めて見せ、グレイはフォルに向き直った。

「ま。それはとてもいいことなんだけどさ？ どうしてフォルっちはここににいるのかな？」

「ここには悪さしなきゃ、入ってこられないはずだけど？」

「っっ」

突然切り替わったよろしくない話題に、フォルは冷や汗を浮かべ、誤魔化し笑いするしかない。

「グレイさま？ フォルちゃんは何も悪いことしてませんよ？」

だが、そこでフォルにとっては、天の助けとも思えるシトリィの一言。

それを聞いたグレイは、元からあちこち自由に跳ねていた灰色の髪を撫で付けながら、

相好を崩し苦笑を浮かべた。

「うーん。まーシトリっちのこと考えればそうかもねえ。

ここはシトリっちに免じて許してあげよう。よかったね。ここに来たのがあたしで。

これがユタやマコだったらおしおき決定だぞ？

ああ、でも、あたしが気づいてるんだから二人ともフォルっちがここに入ってきたこと、

気づいてると思うけどね」

「むーうー。そんなの反則です」

そう言うフォルの顔が心なしか青ざめて見えるのは、

先に述べた通り、今回のような探索の果てに、三騎士に何度もおしおきを受けているからだろう。

実際、フォルの城内での行動などお見通しだったりするのだ。

今回はたまたまそれを真っ先に見咎めたのがグレイで、

あのタイミングで現れたのもわざと狙ってやっていたに違いなか

った。

「それにつ、今日フォルはおしおきされるほど悪い事はしてないですつ。」

黙ってここに来たのはあるですけど」

いまだにおしおきに慣れないフォルは、必死に言い訳を試みる。シトリイに会ったことだって、決して悪いことだとは思えなかった。

むしろ、もっと早く教えてくれればシトリイの退屈を紛らわせるくらいはできたんじゃないのかと思っでいて……。

(第6話につづく)

第6話

フォルがここに来たのは偶然ではあつたけれど。

シトリイに会つたことを、フォルは決して悪いことだとは思えなかつた。

むしろ、もっと早く教えてくれればシトリイの退屈を紛らわせるくらいはできたんじゃないのかと思つていた。

「ふふ。悪いコトしたつてだけでおしおきするつてわけでもないのよ？

フォルっちに身を案じてつて場合もあるのさ。愛情に裏返しつてやつさね。

まー、今回はここに入つただけで留まってくれてたからよかつたんだけどー」

だが、グレイはちよつと真面目にそんな事を言い、

何を思つたのかマントの影に隠れていた円筒型の鞘から剣を抜く。

ビィンツとしなり、幾重にも螺旋を形成するそれに、

フォルだけでなくシトリイまでもがびくりと顔を強張らせていると。

キミらに向けるわけじゃないよ、とばかりにグレイは苦笑し。先程フォルが入つてきた扉の前に立つた。

「で、何でここに入っちゃ駄目なのかって言うと、一旦入ったら同じ扉からは出られないからなんだな、これが」

そして、そんな軽い口調で扉を押すように剣を触れさせる。

すると。

途端に激しい閃光が迸り、剣がありえない角度で跳ね返りしなつた。

それが普通の剣ならばもはや原型など留めていなかっただろう。

極限まで刃を薄くし、螺旋を描くグレイの剣だからこそできた芸当だった。

「む、むう」

それを見たフォルは絶句し、何を気にかけることもなくこの一つしかない扉に触れて入ってきた自分に呆れるとともに、ようやくグレイが言いたかった事に気づく。

「行きはよいよい帰りは怖いってね。まー、つまり、つまるところ、これだけの結界じゃなきゃシトリっちの力は抑えられないってことなんだけど、フォルっちに唆されてこっから出ようとしちゃ駄目だからね？」

「は、はい」

そしてその行動は、シトリイにその事を分からせるためでもあったのだろう。

なんだかしゅんとして俯くシトリイを見て、自分の浅はかさに震えていたフォルは、はっと我に返った。

「それじゃあ、シトリイちゃんはずっとここから出られないですか？ せっかく会えたのに」

「ふふっ、大丈夫だってば。だからこうやってあたしが足を運んではちよつとずつ力の使い方を教えてあげてるんだから。あたしも若い頃はよく暴走したもんだし、慣れたものよ。」

ま、一番手っ取り早いのは魔精霊らしくヒトと契約することではあるんだけどね」

グレイが破顔してそう言うのと、フォルはぱつと顔をあげ、なるほどと手を打った。

「そう言えばグレイさまも相方がいるんですけどね」

「ん、まーね。ガイアットとイシュテイルの契約とはちよつと違うけどね。」

今はきつと多分、フォルっちやシトリっちの王子様と一緒に、あたしのご主人も異世界のどこかにでもいるんじゃないかなー」

元々、ミアソ・セゾントと呼ばれる第三位の間の魔精霊であるグレイは。

ガイアットと悠久友好条約を結ぶ国の一つ、アーヴァインの王室に仕える従属魔精霊であったが。

世界に平和が訪れてからは友好の証として、ユタ・フェアブリッズと共にガイアット王国近衛騎士を務めている。

余所者を国衛の頂である三柱に添えるのは、という声もあがったらしいが。

現ガイアット王だけでなくその兄の『ケイ』とも懇意であり、何よりこう見えても有能だったから、文句は言わせない……
そんな所なのだろうとフォルは解釈していた。

「でも、寂しくはないですか？ 心配にはならないですか？」

「んまっ、氣い遣いねフォルっちは。大丈夫よんよん。ユタだっ
ているし、

今はこうしてフォルっちやシトリっちにも構ってもらってるしね」

グレイはその日一番の笑顔のまま、フォルとシトリイの頭を優しく撫でるようにその手を添える。

グレイの思ったよりも細く長い手は、ひんやりとしていたが、くすぐったくて心地よかった。

「んでー、つまり何が言いたいかって言うと、シトリイっちはいつまでもここにいてるってわけじゃないってことなのさ。まー、フォルっちは特別にここに遊びに来る許可をあげるよ。あたしの同伴つきになるけどね」

そして、続けてグレイがそう言うと、シトリイの表情がぱあっとほころんだ。

「ほんと？ フォルちゃん遊びに来てくれる？」

「それはもちろんですよー。お外に出られるまで、フォルがお外のお話たくさんしてあげるです。あ、そだ。それじゃあ約束のしるしとして何か……んと、あ、これがいいです。『ミオラーペ』をシトリーちゃんにあげるですよ。フォルがここまで来るのに役立つた優れものです」

嬉しそうなシトリーにつられるように、フォルは持ち手のところに赤いリボンのついたそれを手渡した。硝子の盛り上がった部分が、魔法灯の光を反射してきらりと光る。

「じゃあ、じゃあシトリーはね、これあげる」

「うわあ、キレイですね。虹色の羽根の、アクセサリーですか？」

お返しとばかりにぱつと差し出された、小さな一枚羽に銀の細目の鎖がついたものを受け取ったフォルは、感嘆の声をあげつつも、これは何の羽でしょう？ なんて考えていた。

しかも、どこから取り出したのか見ていたはずなのにフォルにはさっぱり分からない。

「うんうん、いいものもらったじゃない。んじゃ、また遊びに来るってことでもう戻る？」

フォルっち、今日午後からお仕事は入ってるでしょう？」

と、それまで二人のやり取りを微笑ましげに眺めていたグレイは、思い出したようにそう言った。

フォルはそれを聞いて、すぐに今日の予定を思い出す。

「もうそんな時間ですか？ それじゃ行かなくっちゃです。って、今更気づいたんですけど、どうやってここから出るのですか？」

思わず、眉を寄せるフォル。

しかし、そんなフォルに対して、グレイは少しだけ人の悪そうな笑みを浮かべた。

「どうやってって、さっきあたしがして見せたじゃない。この壁の反対側に別の通路があるんだけど、そこに向かってこの壁をすり抜ければいいのよ」

「む、無理ですよっ」

自分の物差しでものを計らないでほしいですとむくれるフォル。だがそれでもグレイは引き下がろうとはしなかった。相変わらず人の悪い笑みを浮かべている。

「何言ってー。魔精霊たるもの壁抜けくらいできなくてどうするの」

魔精霊は元々この世界そのものを形成する形のない源なのだから

できるはずだと、
そう言っってはばからないグレイである。

そして、おもむろにフォルの手を掴んで早速試してみましょって
な雰囲気を醸し出し始めたので、
フォルは慌てて声をあげた。

「ムリですっ、ゴリゴリしてひどいことになるですよっ！」
「んもっ、仕方ないわねえ」

いやいやをして泣き顔を浮かべるフォルに、元から冗談だったの
か、
グレイは溜息をついて残念そうに手を離す。

「それじゃ、この中に入ってここから出るしかないわね」

それから手のひらを開きそこから生み出すようにして取り出した
のは、
複雑な古代文字、魔法のルーンが施された『魔精球』と呼ばれる
マジックアイテムだった。

それは元々魔精霊と契約を結んだ人間『従霊道士』が使うもので
魔精霊をその球の中に広がる異空間に送るものである。

「ま、魔精球、ですか？ フォル狭くて暗いから嫌いです」

ちなみに、その中を快適かそうでないかの判断は魔精霊それぞれで違ってくるようだ。

フォルにしてみればあまり居心地のいい場所とは言えなかったが。

「そんなこと言っただつてしょうがないじゃないかー」。

こうして魔精球の中にフォルっち入れてワタシが懐にでも入れて持ち運ぶしか術はないんだし」

「うむう。仕方ないですね」

一度渋るも、それでも受け入れるしかないのを分かっている悪そうな笑みを浮かべているグレイに、フォルはついには観念しましたとばかりに白旗をあげる。

まあ、確かにずっとここにいるわけにもいかないのです。

フォルは、それでもずっとここにいななければならないシトリーに改めて向き直る。

「それじゃあ、フォルもう行くです。今度遊びに来るときは、お得なケイさま情報を教えてあげるです」

「はい。シトリー、楽しみに待っています」

できるのならばフォル自身『ケイ』を探し出し見つけ出したいところなのだが。

こればかりはその時が来なければならぬのだろうと、最近は思うようになつたフォルである。

だが、それでもそう言っ得意げにフォルが八重歯を見せると、シトリイも親鳥を迎える雛鳥のように嬉しそうに笑ってくれるから。

きつとまた来よう。

なんなら来た入り口から入ってしばらくここにいるのも悪くない。

フォルは、そう思いながら。

終始空気が抜けた感じのグレイとともに、その部屋を後にするのだった……。

(第7話につづく)

第7話

「うう、しまったです。ちょっと遅刻しそうです」

それから。狭くて暗い魔精球からなかなか出してもらえず、ようやくグレイに解放された頃にはお昼をまわっていて。

午後一から仕事の入っていたフォルは、ぼやきながらいそいそとガイアット城中心部になる玉座の間へとやってきていた。

「もうみんな来てるですかね」

フォルは誰にともなくそう言って、自分の背丈の四、五倍はある重厚な入り口の扉を押し開きつつ中を覗きこむ。

案の定フォルは最後のようだった。

中にいる人たちの視線が集まってきて、思わず眉を寄せる。

「フォル、入りなさい。あなたが最後ですよ」

「は、はいです。フォル・ムーンウエル・琥珀、失礼しますです」

冷たさはないが強さのあるその声色に、フォルは姿勢を正し玉座の間に入る。

そこは、舞踏会などか楽々開けそうな、広い広い部屋だった。

天井は高く、十二のシャンデリアが等間隔に下りているのが見え、少し視線を下げると採光のためのステンドグラスにぐるりと部屋が囲まれているのが分かる。

床は一面緑の絨毯。

一昔前までは威を張るがごとく万別な武器防具が、ステンドグラスと同じようにぐるりと部屋を囲んでいたのだが。

現王に代わってからは香り失わない魔法の花々達や、引き込まれてしまうかのような個々の深みを持つ、これまたとりの絵画や芸術品が飾られていた。

ガイアット城の中でもとりわけ豪華な部屋であるここには、フォルを除き四人の人物がいる。

初めにフォルに声をかけてきたのが王直属の三騎士の一人である、パール・キオリーン・真珠だ。

その名が示す通り、フォルと同じイシュテイルではあるが。

同じ世代ではなくフォルたちから見れば大先輩にあたる人物で、現ガイアット王の相方でもある。

フォルたち最後のイシュテイル達の誰もが、尊敬の念を抱かずに入られない、そんな人物。

フォルが、畏怖と尊敬をもってそんなパールを見つめていると。

パールは耳元で切りそろえた透けるような黒髪をゆらし、同じようにフォルを見つめ返してきた。

一見無表情のようできてその実多くの感情が伝わってくる悠久の青含ませる瞳には、

フォルに対する親愛の情が滲んでいる。

フォルは、自然とその視線に促され、玉座の前でかしづいた。

パールは立場、フォルだけでなく全てのイシュテイルに対し厳しい所があるが、

生まれ月の輝石がフォルと同じということもあり、その厳しさの中でも、

よく目をかけてもらっているのをフォルは肌で感じていた。

向けてくる視線から判断するに、遅刻ぎりぎりのわけも、午前中での件もお見通しなのだろう。

とりあえず、さほど怒ってはいないようなので、フォルが内心胸を撫で下ろしている。

隣からぼそりと声がかかった。

「どしたの、今日は？ いつも一番に来てるのにさ」

「えーっと、そのう。グレイさまに捕まってたです」

フォルが同じように小さな声でそう返すと。

声をかけてきたその人物、フォルにとっては一緒に悪さをして怒られるのが常になってきている悪友であるルビス・コランダム・鋼玉は、勝手知ったる様子で首までは届かない栗色の短めの髪をかきあげながら、大仰に肩をすくめて見せる。

しゃがんでいる状態なので、右太ももの辺りまで切れ込むスリットからのぞく深紅の輝石が良く見えた。

そんなルビスも当然イシュテイルであり、フォルとは同年代の一人である。

「ふつ、災難だったね。まあ、どうせいつものように入ってはいけない場所にも入ったのだろうけど」

と、二人がそんなやり取りをしていると、ルビスの隣で控えていたもう一人の人物、

同じく同年代のイシュテイルである、ブラッド・ジャスパー・黒英が、

表情も変えず、視線は前に向けたままで、それでいて会話に混ざる気満々な様子でそんな事を口にした。

「まるで見ていたような言い方ですね。その通りですけど」

それに対しフォルはちょっとむくれながらブラッドのほうへ顔を向けるが、

ブラッドは変わらずに前を向いていた。

その様子はまるで彫刻のよう。

うなじが見えるほどに纏め上げられたシニヨンの髪一本一本すら動いていないように見える。

見事に顔の向きすら変えないものだから、左側頭部にある漆黒の輝石もフォルからは当然見ることはできなかった。

だからこそ、そんなブラッドの泰然とした態度は、
本当に午前中の出来事をどこからか観察してたんじゃ、なんて思
わせる。

その所はどうなのかと、改めてブラッドに声をかけようとする
が。

しかしそれは、こほんと辺りに響く咳払いの音によって止められ
る。

(第8話に つづく)

第8話

ブラッドの泰然とした態度は、本当に午前中の出来事をどこから観察してたんじゃない、なんて思わせる。

その所はどうなのかと、改めてブラッドに声をかけようとするが。

しかしそれはこほんと辺りに響く咳払いの音によって止められてしまった。

それは当然の如くパールのものであったが。

それ以前に今は王の御前だと気づかされたのもあっただろう。

「あー、えっと。もう始めちゃっていいのかな？

身内同士でこんなことやるのもなんなんだけど……決まりだからね」

すると、それを待っていたかのように。随分若く、親密的な声が聞こえてきた。

その声の主こそが、現ガイアット王である。

今の今まで玉座に座っていたはずなのに、背景の一部と化してしまっただかのように存在を消すさまは流石というかなんというか、ただものではなかった。

ガイアットの一族を顕す翠緑の髪に、中性的で美しい相貌。

実際見た目の外見だけならば、フォルたちと同じくらいに見えるのだが、
それでもガイアットの国が現王の代に変わってから、この国が大きな変革と遂げ、
平穩を確固たるものにしたのは確かなのだ。

過去の武家国家、軍事国家と言われてきた体制を極力廃し、
現在ではこの世界で五指に入る平和な国であると言われるようになったのは、

ひとえに王の政に対する天才的な手腕によるところが大きかった
だろう。

そんな王は、前王であったレジャイラの実子である。

同じ母を持つということもあって、フォルたちとも家族同然で過
ごしてきたせいか、

そんな家族に対して固い雰囲気になるのが嫌らしく。

王はあけすけなくそんな事を口走り、お目付け役であり相方でも
あるパールにきつと睨まれて、

慌てて言葉を言い換えている。

フォルは顔を上げ、そんなやり取りを見るにつけ、自然と笑みが
零れるのを自覚していた。

そもそもフォルたちが、何をしにここへと来たのかと言うと。

フォルたちに与えられた仕事のために、王から城下への、

外出許可のお言葉を頂戴しに来たわけなのだが。

王自身、その言葉をかける相手が身内過ぎて、改まってかしこま
るのも恥ずかしいようだった。

普通の家のように一声かけて外出できればいいのだが、

王族である以上一定の節度と品格を持って日々行動すべきだとい
うのがパールの言である。

王はそう言うパールに頭の上がらないところがあるようで。
渋々ながら、真面目な口調で言葉を続けた。

「コホン。それでは本日午後、フォル・ムーンウエル・琥珀、ル
ビス・コランダム・鋼玉、
ブラッド・ジャスパール・黒英の三名に、城外への外出の許可を申
し付ける。

その内容については以前から周知であろうが、ユーライジア同盟
四国で十年に一度開催される『建国祭』の、栄誉ある開催地に我ら
地の国が選ばれたことによる、会場の維持活動だ。

同三名は、気を引き締め、心してこの命にかかるがよいぞ」

「はいです」

「了解です」

「確かに、承りました」

それに対しそれぞれの言葉で答える三人。

そしてたった今下された命こそが、フォルに与えられた仕事であ
るのだが。

会場の整備といってもその言葉通りお祭りのための準備をするの
とは意味合いが違った。

『建国祭』は、死後の世界にも続いていると言われる『世界の中
枢』から、

世界を維持していると言われる根元魔精霊を迎え入れ奉り、
地域の平和と活性を祝うお祭りである。

そのお祭りの最も大きな催事の一つに、四つの国（ユーライジア・ガイアット・アーヴァイン・サントスハイ）の代表の人間と、魔精霊が組を作り、根源が訪れる時期になると、大地の底から染み出る『魂の残滓』なるものを集めその数を競う、といったものがある。

四十年周期で祭りの開催国に決定した国には、
どついうわけか祭りが始まる前から魂の残滓が多く出現するようになる。

グレイ曰く、魔精霊の出来損ないが化けて出るのが魂の残滓で、世界のどこでも探そうと思えば見つかるそうなのだが。

祭りの開催地は特に顕著で、あまり増えすぎるとよくないことが起こる前触れにもなりかねないとの事で。

こうしてフォルたちイシュテイルが王の命を受け、交代制で定期的にそれを回収するというわけなのだ。

加えて、魂の残滓回収の仕事をフォルたちイシュテイルがやらなければならぬものにも訳がある。

魂の残滓一体ならば通常人には見ることはできても触れることはできず、それほど脅威はないが。

それが多く集まると、時に人に害を及ぼす危険な魔物へと変貌する。

城下にあるガイアットの人々により形成された自警騎士団は人から国を守る意味合いが強く、

イシュテイルは元々人以外の国を害するものから守るべく生まれ

た魔精霊であることから、
必然的にこういった形がとられるようになったわけだ。

しかし、それは一つの建前で、その実たとえ王族でも働かざるもの食うべからずという本当の理由があったりするのだが。

「それでは気をつけて。寄り道をしないように、日が暮れるまでは戻ってくるのですよ。

特にフォルとルビスは」

お決まりの、意味がないようである王からの外出許可が出た後。
釘を刺すがごとく、パールがそんな事を口にするのは理由がある。

二人は事実、城の外どころか町の外に出ようと目論んだことも一度や二度ではなかったからだ。

基本はルビスがそれを計画して、フォルが実行し、大抵町入り口の番をしているユタやグレイに捕まるといった流れだが、今回ももちろん挑戦する気満載だったのを見透かされたのだろう。

「アハハ、やだなあ。パールさまってば。そんな分の悪いことそう何度もしませんって」

「そ、そうですねよ。ケイさま探しに外なんて出ないです」
「……」

ルビスとフォルはそれを証明してしまうかのように息を合わせて
そうまくし立て、

それでは行ってまいります！ と敬礼なんぞして逃げるように駆け出していつてしまふ。

それを半ば諦観した様子で見送るパールと、何も考えていないのか微笑ましげにただ見送るガイアット王。

さらに、置いてきぼりをくった迷子のように、ぽつんと出遅れ取り残されるブラッドの姿がある。

「ブラッド？ 二人を頼みましたよ」

「……ふっ」

声をかけられるのを待っていたのかと、窺うようにパールがそう言う。

その通りだったのか、心なしか嬉しそうな微笑を浮かべるブラッド。

「努力はするよ。私の手には余るだろうけどね」

それからさらにはぼそりと、それでいて楽しそうにブラッドはそんな事を言い残すと、

足音すら立てずにその場を去っていく。

そして。

その場にはパールとガイアット王だけが残されて。

「よかつたんですか、コージイ？ あの三人で組ませて。一体どんな厄介ごとが起こることやら」

伺うように、パールは王の……パートナーの名を呼んだ。

「厄介ごと？ 結構じゃない？ もしかしたらそれと一緒に冗さんがやってくるかもしれないしね」

そう言うガイアット王の表情は変わらぬ笑顔であったが、それ以上に何かが起こるのを期待しているかのような、あるいはこれから起こることを楽しみにしているかのような、そんな表情にもパールには見えて。

「……まあ、あなたがそう言うなら何も言えませんがね」

深く息をつき、達観しきった呟きをもらすのだった……。

(第9話につづく)

第9話

それから。

間もなく追いついたブラッドとともに、フォルたちは城門の番をしていたグレイに見送られ、

城下町の大通りへとやってきていた。

開けた視界、見上げ歩くと、青とも白ともつかない空が目に入る。今すぐ雨が降ってくるようなことはなさそうだが、陽射しもそれほど強くはない、そんな空具合。

何とはなしに、フォルがその空を見上げていると。

気付けば、フォル達の影のごとく、追いついていたブラッドが、ふいに口を開いた。

「そうだね。折角だから……余興をしようじゃないか。

今から、陽の光が茜色に変わるまでの間に集めた魂の残滓の数を競う、というね。

最下位のもものは当然罰がある。一位になったものの実験に一回付き合う……とか」

「あ、それいいかも。ちょうど実験体がほしかったとこだし」

淡々と、それでいて楽しそうな雰囲気を見せるブラッドに、ルビスもにんまりと人をくったような笑みを浮かべている。

気づけば、二人はなんだか同じような人の悪い笑みを自分に向けている気がし。

自らの身に危険を覚えたフォルは、慌てて口を挟んだ。

「ち、ちよつと待つですつ、余興をするのは最悪いとしても、何ですかその罰はっ！

じ、実験って」

「……ああ。今ちよつと新しい召喚魔法の練習をされていてね。生きのいい贄を探していたところなんだ」

ブラッドはそう言って口の端だけ更に笑みの度合いを深め妖艶な雰囲気すら醸し出し。

「そうそう私も新しい魔道人形の製作を考えててさ、ちよーつとお手軽な実験体が欲しいなあって思ってたところなのよ」

ルビスも併せるように子悪魔な笑みを浮かべて頭からつま先まで舐めるようにフォルを見つめた。

「だ、ダメですつ、いやですつ！ つて、そもそもフォルが勝つたらどうするんですかつ、

フォルには何の特にもならないですよっ」

もちろん半分以上その場のノリな冗談ではあるのだが。それが分からないフォルは既に追い詰められたリカバースライムのようにふるふると震えている。

すると、そんな反応を楽しむかのように、ブラッドが再度その口

を開いた。

「ふふ。何を言うのかと思えば。この私に勝つ気にいるのかい、フォルくんは？」

「え？ いや、そのう、そう言うつもりじゃないですけど」

豊富な魔法の知識とそれを十二分に扱いつる魔力と素質を持つブラッドは、

同世代のイシュテイルの中でも上位の戦闘能力を誇る。

それは魂の残滓集めに対してもそれは顕著であり、
本当にそんなつもりじゃないのにそんなブラッドに対して勝利宣言をしてしまったに等しいフォルが、いよいよどうしようもなくなっておるおるとしている。

ブラッドは、今までほとんど変わらなかった無表情の仮面を崩すかのように、

穏やかに微笑んで、言った。

「ふふつ。確かに、それでは平等じゃないかもしれないね。」

それなら、もしフォルくんが勝ったのなら、特別に私が……私だけが知っているケイクンの秘密を話そうか」

「あー、それはいいかもね。フォル、そのこと知りたがってたもんねえ」

続いて同じように相槌を打つルビスに、フォルははっとなって琥珀の瞳を見開いた。

最後のイシュテイル達が、同じ母から生まれたというのとは別に、共通する部分。

それは、それぞれが『ケイ』についての記憶のようなものを持っている、ということだった。

フォルは、未だそれをはっきりしない夢でしか見る事ができなかったが。

フォルより早く生まれた彼女達はそれを知っている。

ケイのことなら何でも知りたいフォルは、それを聞きたかったが、いつも秘密だとかはぐらかされて聞けずじまいだった。

「ううう。そんな、いぢわるしないで教えて欲しいです」

「そんなこと言われてもさー、アタシだってケイさんのことについての記憶、

思い出したの最近だし」

それでも気心の知れた悪友ですかと言わんばかりにフォルに、ルビスは頬をかいて弁解する。

その言葉に嘘はないようだったので、それじゃあ仕方ないのかも、とフォルが思っていると、

付け足しするかのように、ブラッドが真面目な口調で言葉を続けた。

「それにその秘密は……必ずしも綺麗なものとは限らない。いや、少し違うな。」

いくら家族で、心置けない関係であっても、おいそれと口にできるものじゃないんだ」

「そうなのですか？ それならこんな罰とか言って話しちゃうの、いけないんじゃないですか？」

「……」

フォルが思わず首をかしげ問いかけると、言われてみればその通りだと、

盲点だったとばかりに押し黙るブラッド。

「まあ……なんだ。ようは、そう言うキツカケが欲しいということだ。」

それでもいつかは話したい、話さなくてはいけないものなのだから。お互いだね」

自分でも答えを探るように、迷うようにそんなことを言うブラッド。

その秘密、記憶は、思っていたよりも心安く楽しいものじゃないのかもしれない。

フォルは、いつもよりも影の多いその時のブラッドの表情を見て、そう思わずにはいられないのだった……。

第10話

そうして、本日のフォル達の仕事が始まりを告げた。

『魂の残滓』は、前述通り、大地から染み出てくる意思ある魔力の欠片である。

捕まえると言っても手掴みや網などで捕まえるわけではない。

思念体であるという本質の部分において、魔精霊とごく近い性質を持つていたため、

その捕縛には専用（一つでたくさん捕縛できる）の黒い魔精球が使われることが多かった。

そんなわけで現在、フォルの手にはもう少しで一杯になる魔精球が一つ握られている。

魂の残滓集めを一日かけて行えば、その数、十は軽く超えるのだから、まだまだ序の口だろう。

フォルは、月の魔力の扱いに長けており、アーヴァイン

同世代のイシュテイルの誰よりもよく効く鼻で魂の残滓を探しあて、見つけては魔精球を使い、

草葉の陰に潜むものや、家々の漆喰の裂け目から這い出してきた魂の残滓たちを捕獲する過程をひたすらに繰り返す。

初めのうちは、毛玉のようなりをして逃げ惑う魂の残滓に対し、

それこそ狩りを楽しむような猫の気持ちでいられたフォルであったが。

それが終わりなく続くようであると、だんだんと退屈が増してくる。

だが、今回は一番を競っている最中なので、退屈でも手を緩めるわけにもいかなかった。

「うん。でもでもっ、二人の成果がとっても気になります。こんな調子で大丈夫かな」

ガイアットのために命を張って戦うようなこととはまた違うだろうが。

この魂の残滓集めにおいても二人のほうが上であるのはフォル自身重々承知していた。

そんな二人に勝つためには、一つしか思い当たらない。

それは、魂の残滓が活発になる祭りの時くらいしかあまり見かけることのない、

魂の残滓が何千何万と固まってできた、『黄泉の魔物』を見つけることである。

「って、こんな町中にいたら大事件ですけどね」

何しろ黄泉の魔物は獰猛で凶暴であり、人や魔精霊を襲うことだつてあるのだ。

それに遭遇する確率なんてそれこそありえない確率だろう。

だが。

フォルの厄介ごとを呼び込む体質は、そのありえない確率を踏破するらしかった。

「ひいひいつ？ ば、ばけものっ！」

どこからかフォルの耳に入ってきたのは、悲鳴の混じった叫び声。

フォルは、すぐにその声のほうへと駆け出す。

滑り込むように、出店と出店の間にある細い裏通りを駆けていくと、

その先には主に果物や野菜を扱う店の在庫品をしまっておくための長屋か何かなのだろう。

木張りの引き戸からこぼれ出るかのように。

フォルにとって顔馴染みな店のおじさんが転がり出てきた。

「やおやおじさんっ、だいじょぶですかっ？」

「っ……あ、ああ。フォルちゃんかい！ な、中につ、ばかでない黒いやつがっ」

フォルがおじさんの元に駆け寄り、声をかけた瞬間。
木張りの引き戸は紙くずのように切り裂かれ……広がる闇の中か
らのそりと、

間口を完全に塞ぐほどの大きさの、黒一色に色取られた、
岩ゴーレムのようなものが這い出してきた。

そいつは、赤く光る一つ目を爛々と燃やし、彷徨わせていた視線
の照準を合わせるかのように、
立ち尽くすフォルを見据えてくる。

何故そんな所にいるのか。

今の今までどうやって隠れていたのかはフォルには見当もつかな
かったが。

それは間違いなく、黄泉の魔物、そのものだった。

世界に存在する属性ぶんだけ種類がいるそれは、

身体が大きく強いものならば人間の兵士100人にも匹敵すると
いうが。

目の前の黄泉の魔物はそれでも小さいほうだろう。

見た目で判断するに、属性は『地』か。

それが一つ吼え、踏みしめるように大地に足を下ろすと、

びりびりとフォルの足元が震え、地面に亀裂が走った。

「おじさんっ、ここはフォルに任せて早く逃げるですっ！」

「そ、それがそのっ、こ、腰が抜けてっ……」

慌ててフォルがそう叫ぶも、冗談抜きに腰を抜かしてしまったのか動くこともできないでいる八百屋のおじさん。

このままじゃまずいと、フォルは背中から引きずるようにしておじさんを引っ張った。

しかし、むうつと唸りながら気合を入れるものの、

身体だけなら目の前の黄泉の魔物にも引けをとらないおじさんはビクともしない。

黄泉の魔物は、その隙を逃すはずもなく。

気づけばすぐ目の前に迫ってきていて。

振り上げるのは、でこぼこ黒光りしたフォルの顔の倍はあろうかという大きな腕。

「ひいひいっ!?!」

「……っ」

フォルはとっさに、庇うようにおじさんの前に出て。

その瞬間、聞こえ感じたのは。

その腕による衝撃や音ではなく、風切る銃撃音と岩の崩れるような破砕音。

フォルがおそろおそろ顔を上げると、ありえない方向に捻じ曲がる黄泉の魔物の腕と、

そこに蜘蛛の巣を張るかのようないくつもの弾痕が見て取れた。

「間一髪だったねえ？ 大丈夫フォル？」

続いてそんな明るめな声が耳に届いて、フォルが顔を上げれば。

深い栗色のショートヘアをなびかせ、

颯爽と屋根上からフォルの隣へと降り立つルビスがそこにいた…

…。

(第11話につづく)

第11話

「間一髪だったねえ？大丈夫フォル？」

そんな、朗らかな声が耳に届いて、フォルが顔を上げれば。

深い栗色のショートヘアをなびかせ、颯爽と屋根上からフォルの隣へと降り立つルビスがそこにいた。

その手には、ゴツイ鈍色の円筒式の銃が握られている。

「ルビスっ！　ありがと、助かったですっ。にしてもよくここが分かりましたね」

「まあね。あれだけデカイ反応があれば誰だって気づくでしょ。

……それに、今日はなんとなく出るような気がしてたしね。フォルがいるし」

「ふふ。本当に出るとはね。念のためにフォルくんが目に届く範囲にいて正解だったわけだ」

「あ、ブラッドもいるですか？」

続いて狭い路地から音もなく現れたブラッドは、

そんなフォルの呼びかけに応える代わりに何やら呪を唱える。

すると、フォルの背後でへたっていた八百屋のおじさんの周りに風が発生し、

おじさんが驚きおののく間も惜しいとでも言うように……ふわりと宙に浮いて、

ブラッドとすれ違って狭い通路の向こうへと消えていってしまった。

それからしばらくして、んぎゃっ！　と地べたに叩きつけられた

かのような音がした。

「先程のはいただけじゃないなフォルくん。……力も魔法も使わずにあの巨体を運ぶなど、

敵に襲ってくれといっているようなものだよ」

「それはその通りなんですけど……もっと丁寧な扱ってあげなきゃおじさんがかわいそうですよ」

皮肉にも聞こえるブラッドのセリフに、せめてもの反撃を試みるフォル。

対するブラッドは、そこまで面倒見切れないよとばかりに……軽く笑みをこぼすのみだった。

「ちよっと、そんなところで話し込んでる場合じゃないでしょ、来るわよ！」

ルビスが大仰な銃を構え直すと、その銃撃を受けて後ろのめりになったまま硬直していた黄泉の魔物は、ゆらりと起き上がり……咆哮する。

すると、その声に応えるかのようにみしみしとフォルたちのいる地面が盛り上がった。

とつさにそれぞれが散開すると……ついに地面は決壊し、貫く槍状の黒い岩石が飛び出してくる。

「フォルつ、援護するから近距離で足止めを！ ブラッドは大きいの一つヨロシクっ！」

「了解ですっ！」

「……承知」

そして、そう叫びながら続けざまに三発、両手で抱えるようにして鋼の弾丸を打ち出した。

鋼玉の名にふさわしい『^{ブルック}金』属性の魔力と技術の結晶であるそれは、

風を捲きつつ螺旋回転を作り出し、そのうちの二発は黄泉の魔物の残った腕を貫通し、

残りの二発はその平らな足の甲を縫い付けるがごとく地面に着弾する。

「……………『^{ビートルオン}獣化』っ、タイプ・フライングムスターっ！」

それから、湧き上がる砂埃に紛れるように、体勢を低くし、力ある言葉を紡いだフォルは、

その言の葉すら置き去りにするスピードで、

掬い上げるように変化した右手、それは猛獣をを思わせる鋭い爪だった……を、

黄泉の魔物の胴体にめり込ませ、回転上昇させながら、その顎を砕いた。

さらに、黄泉の魔物のダメージはそれだけに留まらず。

真一文字に亀裂が入り……はらはらとその身をこぼす。

いや、こぼれているのは岩の身体ではない。

それをひとつひとつ構成していた魂の残滓たちだ。

「ば、バカっ、やりすぎだってば。逃げちゃうでしょっ!!」

「あう……そう言われても、フォルは力の加減ができないんですよ」

フォル・ムーンウエル・琥珀の名に示され、フォル自身の主なる属性である、

『アーヴァイン月』の能力の一つに、
様々な動物、魔物、魔精霊の力の一部あるいは全体を模す『獣化』
が上げられるが、

その力の源である月の出る闇夜の時分でないこともあって、
フォルはその力をうまく制御することができず、持続時間もそう
長くなかった。

それは……まだフォル自身が未熟なせいもあるのだろう。
すっかり元に戻ってしまった細く頼りない腕と、わらわらと逃げ
惑う魂の残滓たちを見て、
フォルがおろおろしていると。

「……………喰らい尽くせ、『シヤドウ・ブレデター闇喰蝕物』」

背後から、ブラッドのそんな頼もしい声がして……刹那、黄泉の
魔物の持つその色よりも深く昏い、闇色の水面が黄泉の魔物の足
元に広がり、そこに生まれた巨大な漆黒の影引き連れたあざとが、
漏れること許さず……黄泉の魔物を包み込むようにひとのみして

しまった。

そして。

闇のあざとは、そのまま逆回しのように水面へと還って行く……。

(第12話に続く)

第12話

背後から聞こえてくるのは、ブラッドのいつも以上に頼もしい声。

刹那、黄泉の魔物の持つその色よりも深く昏い、

闇色の水面が黄泉の魔物の足元に広がり、そこに生まれた巨大な漆黒の影引き連れたあざとが、

漏れること許さず、黄泉の魔物を包み込むようにひとのみしてしまった。

そして。

闇のあざとは、そのまま逆回しのように水面へと還っていく……。

「……五千はくだらないか。まあ、私一人の手柄ではないから数に入れないけどね」

「さ、さすがですね」

「そつないんだからなあ、もう」

相変わらず闇の魔法はおつかないなあと、フォルとルビスが呆気に取られていると。

ブラッドは勝ち鬨とも言える呟きをもらし、未だ残る闇の水面に手を伸ばしてすぐに引き抜く。

そこには、真っ黒に染まった瓶が握られていた。

目を凝らしてみると、その表面に複雑な呪が刻まれていることが

ら魔精球の代わりのようなものであることが分かる。

こっちのほうに、微細な黴菌のごとき魂の残滓たちが見えやすいのは確かだった。

「うを、なんか瓶まで用意しちゃってるし、魂の残滓ちっちゃくなってるし……」

「うむう。凄いですブラッドちゃん。奇術師みたいですよ」

「……………ふふ」

そんな偽者ではない本物だと主張しておきたいブラッドであったが、

それでも褒められたのが嬉しいのか、陽の元で紫がかつたつやのある髪をかきあげつつ、

まんざらでもなさそうな笑みを浮かべている。

その様子で喜怒哀楽がないのではなく表現が下手なだけなのがよく分かるのだが。

ブラッドがその瓶を羽織った黒マントの奥、懐に仕舞い込んだところだ。

その表情はいつになく険しいものに変わった。

それは、上空から豪雨のように降り注ぐ。強烈なまでの殺気に気づいたからである。

そのまま空を見上げると、遙か遠くの青色に、星の形をした黒い染みのようなものが見えた。

「星……いや、あれは……手、か？」

おそらく手の形をした何か。

もつと良く見ようとブラッドが虚空を凝視していると、

ややあつてそれにフォルもルビスも気づき、同様に空を見上げてみる。

「ん？ なにあれ？ あれももしかして、黄泉の魔物？」

フォル、私がつつてあげた『ミオラーペ』貸してよ。あれ、実は望遠鏡機能もついた優れものなのよ。」

「うつ……そうなんですか？ それは困ったです。ついさっきシリイちゃんにあげちゃったです。」

「ええ？ 何それ、もう。……ま、アレはフォルのものだし、どうこう言わないけどさ。」

眉を八の字にさせるフォルに、ルビスは大げさに肩をすくめて見せ、それじゃあどうしようかなと、道具袋を漁ろうとした、その瞬間だった。

ミツケタゾ！

どこからともなくそんな声が聴こえて。

それが、あの上空にいる黒い染みが発していると、どうしてか分かってしまったフォルは。

半ば無意識の状態でルビスを突き飛ばす。

「ちょ、何す」

その瞬間。

いきなりのことに文句を言いかけ、起き上がろうとしたルビスとフォルの間を分かつように。

目視できないほどに白く輝く灼光が、何かを削り取り消し去るような激しい音をたて、

地面に消えていく……。

「な？ 今の」

「……っ」

ルビスの声は、怒りではないものに震えていた。

今のは明らかに、こちらを殺すための一撃で。

もしまともに受けていたら真っ二つじゃすまないかもしれないなかった。

自分もルビスも無事であったと気づくと、安堵とともに冷たく嫌な汗が背中に伝うのをフォルは感じていた。

まだ終わってはいない、安心してられないと、そう思って再び空を見上げると。

その黒いものは、何を思ったか、そこから移動するかのよう
に、雲の中へと隠れてしまう。

「……逃げがしはしない」

瞬間、辺りに蔓延するのは闇の魔力。エケゼリオ

呟いたブラッドの方を見ると、その背には既に漆黒に煌く翼を生
やし、

むせるフォルたちに構わず羽撃いて砂埃を吹き散らすと、空に向
かって舞って行ってしまった。

「ごほごほっ、ちょ、何よブラッドったら」

「ルビスちゃん、フォルたちも追いましょう！」

わけの分からないままぼやくルビスに、フォルは深刻さすら窺え
る表情で叫ぶ。

「追っつて、どうやってよ？」

「【獣化】でブラッドちゃんみたいに翼をつけるですっ」

そう言うや早く、フォルはアーヴァイン月属性魔法、獣化を唱えた。

途端、フォルの全身が発光し、背中に張り付くように生まれ出で
たのは純白の翼だった。

ルビスはそんな息もつけなほどのフォルを見て、なんだか焦っ
ていることに気づく。

「だから待つてつて、ワタシは？ 今日空飛ぶアイテムなんて持つてきてないんだけど？」

「フォルに掴まってればいいですつ、それより早くつ、ブラッドちゃんが危ないっ」

あれは普通じゃなかった。

本能的に危険を感じたフォルに、得体の知れない焦燥感が襲う。

「わ、わかつたわ」

ここで会話している状況ではない事はルビスにも分かったので、一つ頷いてからすぐさまフォルの腰にしがみついた。

すると、それが切欠であるかのごとく、フォルは飛び上がる。

途端に自らの腕に自らの重みがかかって、ルビスは僅かに呻いた。

「く、失敗したかな。これはちょっとあんまり持ちそうに、ないかも」

みるみるうちに遠くなる地面。

やっぱり自分は別の手段で行ったほうがよかったかもと、ルビスが後悔し始めた頃。

さらに絶望的なフォルの声が、ルビスの耳朵を刺激した。

「ごめんなさいです、ルビスちゃん」

「んー、何？ なんだって〜？」

「フォル、もう駄目ですっ。っ、つばさが」

そう言われてルビスが顔を上げると。

魔力の不安定な様を表すかのように、ブレたりうねったり、危なっかしい飛び方をするフォル。

ルビスは、そこまで来てようやく、重要なこと、自らとフォルの愚かさに気づかされた。

それは、月夜の下でもない限り、フォルが獣化を長時間保ってられないということ。

今は日も高く、曇ってはいるが太陽もしっかり顔を出している。

「ち、ちよっと、もう結構上がってるわよ！ ここで落ちたら洒落じゃすまないって！」

「わ、わかってるです〜、う、むむ、お、重い。うにゃあああーっ！」

びゅう、と急に吹いてきた強風に圧されるように、フォルは体勢を崩してしまっ。

「ワタシは軽いほうよ失礼ねっ……った、きゃああっ！」

そして二人は。

風に流され、きりもみするようにすっかり離れてしまっていた大

地に向かって、
墜落して行ってしまったのだった……。

(第13話につづく)

第13話

「おい、大丈夫かい？ しつかりしたまえ」

柔らかな、品を感じさせるような声が聞こえる。

肩を軽く揺らされて、意識を失っていたらしいフォルは、はっと我に返って起きあがった。

「ほ、よかった。ワタシが無事だったんだからフォルが無事じゃないわけないんだけどさ」

そこには、思った以上に元気そうなルビスと、全身緑尽くめのマントにテンガロンハット、きらきらラメの仮面といった、いかにも怪しいですと全てで表しているかのような人物がそこにいた。

「な、なな、誰ですかっ？」

思わずフォルが後退すると、僅かに残る芯から来る鈍い痛みがフォルに全身を通過する。

空からまっさかさまに墜落して、無事だったのには驚きだが、流石に無傷ではないらしい。

痛みにフォルが身を擦じらせていると、その怪しい仮面の人物は苦笑して口を開いた。

「おっと、まだ動かないほうがいい。今、俺様の魔法で治療中だからな。

ああ、そつだ。自己紹介がまだだったか。俺様は……ガイアット仮面と言う。さすらいの冒険者だ」 「……？　そ、そうですか」

名前を名乗るところで悩んでいるかのような間があつて。
なんだか変だなと思つたフォルであつたが。

実際に添えられた肩辺りから、透けて光る魔力で構成された『水（ウルガヴ）』の魔力が、
フォルをいたわるように全身に伝っているのを理解する。

それは【ディーネ・マイル】と呼ばれる、悪戯してはよく怪我をするフォルにとってみれば馴染み深い回復に類する魔法であつたら、とりあえずされるがままフォルは頷いておいた。

実はその時。

その馴染みの魔法を扱う人物が誰なのか。

フォルは日頃の観察眼の賜物で検討がついてしまったのだが。

どうやら、相手が正体を隠しておきたそうだったので、乗ってあげることにしようなんて考えていた……とは、きつと本人以外には分かるはずもなかつただろう。

そんな中、一足早く目が覚めて治療も終わっているらしいルビスが状況説明をしてくれた。

「ワタシたち、あれから風に流されて、町の外に出ちゃったみたいなのよね。」

ほら、向こうに城門が見えるでしょう？　これだけ移動しちゃったのと、二人とも無事だったのは、

フォルの消えかけた翼が、風を掴んでたからじゃないかしら。それに、ここらは長く伸びた草々が生い茂ってるしね」

「でだ、そこにちようど俺様を通りかかったってわけさ。いや、驚かせてもらったよ。」

何が降ってきたのだと思って見ていたら、地の国の最も愛すべき宝である魔精霊……見目麗しき美少女たちが舞い降りてきたのだからね」

ガイアット仮面と名乗る人物は、ルビスの言葉を受けて、芝居がかった口調でそんな事を言う。

「ガイアット仮面さん、それは大げさすぎだつてば。ワタシたち結構かつこ悪く落つこちてきたと思うんだけど。……まあ、これはこれでありなんだけどさ」

「何がありなんです？」

大げさなんかじゃないさと翠緑の髪をふあさつとかきわける、ガイアット仮面のことを流してしてフォルがそう聞き返すと。

ルビスはあれ、言わなかったっけ？　という顔をして言葉を続けた。

「ほら、今私たちって城下町の外にいるじゃない？ ユタさん達も気づいてないみたいだし？」

「はっ、そうですねっ。これでお外にケイさまの手掛りを探しにいきますよっ！」

思い出したのは、今日の仕事とは別にルビスと前々から計画しては失敗していた事、

『ガイアット王国を自分たちだけで脱出計画』である。

普段ならどんなに頑張っても三騎士であるユタやグレイに捕まるか、

二人を含めた警護をたんまり引き連れた、身につまされる息苦しい外出のみだった。

それでも部屋から出ることすらままならないシトリイに比べればましなのかも知れないが。

どうやら今回は咎められることもなく、外に出られたらしい。

そこでフォルは、これも元はと言えばブラッドのおかげだと、いなくなったブラッドのことを思い出す。

「あ、それよりブラッドちゃんは？」

「ブラッド？ あー、大丈夫でしょう。いいのよ、勝手に一人で引っかった人はほっとけば。」

きつとそのうちになんでもない顔で戻ってくるんじゃない？」

「……………なんだか面白そうな話をしているじゃないか。私にも

聞かせてくれるかい？」

と。いきなり背中越しから凄みのきいた低め声が響いてきて、ルビスはがばつと振り返った。

「ぶ、ブラッド？ あんたいつの間に。あのへんなの追ってたんじゃない」

「結局逃げられてしまつてね。近くにはいるみたいなんだが……どうしようかと思つていたら二人を見かけて、こうしてやってきたわけなんだ」

慌てるルビスとは対照的に、きっと敢えてやっているのだろうが、それこそなんでもないような顔をしてそう言うブラッド。

前半のほつておけ発言よりも、後半ののけものにされている感じがしなくもない言葉に怒っているのか、拗ねているのか。

さあ早くその計画とやらを話しなさいとばかりに。

一匹狼のようできてさびしんぼつなブラッドは、ルビスの次の言葉を待っていた……。

第14話

「そうね。協力してくれるのなら話したほうがいいし。あ、でも、一旦この場を離れない？ こんな城下町の近くじゃユタさんたちに気づかれないとも限らないでしょう？」

ちゃっかりついてきたかと思ったら、早く話したまえと急かすブラッドに。

ルビスは苦笑を浮かべつつもそんな提案をする。

「いや……大丈夫のようだよ。少し上空から見えていたんだが、先程のあのルビスくんたちを襲った一撃、あろうことか地下の水脈にまで届いていたようだね。中央広場のものより大きな噴水ができていたよ。……今頃、八百屋の主人はてんてこ舞いだろうが、そこに『水』使いのサフィくんやユタ師匠も出張っていたようだから、しばらくは手を離せないはずだ。……その混乱に乗じて脱出とは、流石はルビスくん。悪知恵が働くね」

初めは淡々と、そのうち人の悪い笑みすら浮かべて感心したようにそんなことを言うブラッド。

（ちなみにサフィもフォルたちと同じ年代のイシュテイルの一人である）

その内容がやけに細かいのは、ブラッド自身が言うようにそれをしばらく傍観していたからなのだろう。

「……って、それすら私のせいみたいな言い方しないでよ。」

ま、いいけどさ。一蓮托生ってことで。そっちはサフィちゃんたちにお願いしとくとして……歩きながら話しましょうか」

「つまり、これからどこかへ向かうのかい？」

「そう。ここから海岸線沿いに歩いて、ガイアットの塔まで、ね」

片眉だけ僅かに上下させ、面白そうだと呟くブラッドに、ルビスもしたり顔で返す。

そんなルビスの表情はいつにも増して、何かを企んでいるかのような、楽しげな笑みを浮かべていた。

ガイアットの塔。

それは、地の根源魔精霊、ガイアットを祭る霊所の一つだ。

ガイアットの国からすぐに見える海を南西に下り、歩きで二刻ほど進んだ、比較的近場にある。

初の自由な外出の割には、何度か足の運んだことのある馴染みの場所の一つでもあった。

「ふむ。それは理解したが……で、その怪しい人物は、何者だ
い？」

と、そこで、一つ納得するように頷いて見せた後、今までずっと疑問だったのだろう。

ガイアット仮面に向かってそう尋ねるブラッド。

「あ、こちらお……じゃなく、ガイアット仮面さんです。

飛行に失敗して落っこちたフォルたちを助けてくれた、通りすがりの旅人さんです」

「申し遅れたな。俺様はガイアット仮面という者だ。以後お見知りおきを、美しいお嬢さん」

フォルが簡潔にそう説明した後、ガイアット仮面は帽子を取って、気障に一礼してみせる。

こぼれ出たのは、つやのある翠緑の髪だ。

「……怪しい」

しかし、いくら下手に出ていようと顔も見せない、名前はどう見ても偽名であるとなると、

ブラッドが呟くように怪しい人にしか見えなかった。

「ふっ、そんな怖い目で見つめないでくれたまえ。美人さんにはやはり笑顔だよ、笑顔」

ブラッドは、視線だけで尻込みさせるような眼力を持ってガイアット仮面を見据えるが。

それを受けてもどこ吹く風で、仮面越しでも分かる笑顔を作る。

「……っ」

だから、というわけでもないだろうが。

しばらくして、ブラッドは何かに気づいたのか、驚愕に漆黒の瞳を見開き、ぼつりと言った。

「あなたは、もはや……ガイアットの一族の？」

「ふむ、その通りさ。俺様はガイアット一族のはしくれなのだよ」

少しばかり驚いた様子で、ブラッドの言葉に頷くガイアット仮面。

「そ、それではあなたが……最後の？」

「最後の、何かね？」

「……いいえ。すみません。なんでもありません」

ブラッドは何かを言いかけ、ガイアット仮面から顔を背ける。

いつのまにか、ガイアット仮面に対しての言葉遣いも丁寧になつており、

平常ならばまず見ることでできないブラッドのそんな反応に、

思わずフォルとルビスはぼかんとしてしまった。

「なんか、ブラッドがいつにもまして変なんだけど……ま、いつか。それよりフォル！」

私たちがっぱ運が向いてきてるかもしれないわよ。これで唯一の問題も解決しちゃったかも」

「むむ？ どういうことです？ フォルにも分かるように教えて欲しいです」

疑問符を浮かべたままフォルが首を傾げると。

あんたはもう、という顔をして、ルビスは言葉を続けた。

「だからね、これから向かう目的地、なんで向かうのかはこの後

話すけど、

ガイアットの霊所なのよ？ その血をひくといわれるガイアットの一族がいなきゃ入れないじゃない」「え？ あ、そうでした。つまりその役を、ガイアット仮面さんに頼むんですね？」

なるほどそうかと、フォルがぼむと手を叩きガイアット仮面を見上げると。

当の本人は俺様かい？ と何が何だか分かっていないような反応を見せているのが印象的で……。

(第15話につづく)

第15話

ルビスはガイアット仮面に改めて向き直り、猫なで声で言葉を紡ぐ。

「お願い、ガイアット仮面さん。引き続きワタシたちを助けてくれないかしら？」

燃えるような赤い瞳を潤ませてお願いするルビスの様は、フォルから見ても決まってるですねえと思わずにはいられなかった。

こんな時ばかり可愛さが増すのはどうしてなのでしょうと思っている。

「ふ。言われなくとも。君達の願いを聞き入れるのは当然さ」

拍子抜けするほどあっさり承諾するその台詞はやはり陳腐で、どこか芝居がかっている。

だがやけに似合っている気がするの、その台詞に、長年をかけて研磨したような、

経験を感じたからだ。

何のためのそうする必要があったのかは、フォルには見当もつかなかったけれど。

そんなこんなで。

徐々に雲も晴れ、陽射しが暖かく強く感じられるようになった道中を、四人は歩いた。

先頭にルビス、その隣にフォル、二人のちよつと後ろにブラッドがいて、

三人から少し離れた殿にガイアット仮面がいる。

ガイアットの塔までの道のりは、元々大所帯の馬車が通れるほどに整備されているため、

非常に歩きやすかった。

白く、限りなく平らに近い砂利の本道は勿論、その周りに緑一帯広がる風靡く草原も、

馬車三台分ほどまでは綺麗に短く刈り取られ、魔物や野生の動物が潜んでいてもすぐ分かるようになっていた。

僅かに風に乗って聴こえてくるのは、波の音と海鳥の声。

ルビスは、そんな音を耳にしつつ、涼しげな風に目を細めながら、本題を切り出した。

「えーと、何から話せばいいのかな？ フォルとは前々から計画を立ててただけど、

今回の脱出劇その後の大いなる目標は、いなくなったケイさんの手がかりを掴むことなのよ。

ガイアット仮面さんは知らないだろうしよく分からない話かもしれないけど」

「ふむ。ケイとな？ かのもの話ならば俺様も聞き及んでいるぞ。

勇敢で、強大な力を持ち、風より早く立ち回る様にも気品がある、無双の槍手、とか」

「ガイアット仮面さんもやっぱりケイさまのことよく知ってるんですね。」

この際だから色々詳しく教えてほしいです」

「……」

ガイアット仮面がルビスの言葉に首を振ると、案の定食いついてきたのはフォルだった。

ブラッドもなんだかガイアット仮面を推し量るような瞳で見つめている。

「いや、それは後にとっておこうか。ルビスちゃんの話の腰を折ってしまうからね」

だが、ガイアット仮面がそう言って話の腰を折ってすまなかったねとルビスを促すので、

フォルもブラッドもまずはルビスのほうへ注目を移した。

ルビスはそれを待ってから、言葉が続ける。

「それでね。いろんな手がかりを探してて、ようやく一番大きなネタを掴んだのよ。」

ケイさんがガイアット王国から、この世界から失踪したと言われる場所がどこだったのかってね」 「つまり、その場所こそが、

これから向かうガイアットの塔、だと？」

興味深げで答えを先示すブラッドに、ルビスはその通りとばかり

に頷いてみせる。

「ふふ。それは灯台下暗し、だったわけだ」

「むう。そんな事今までもつたいつけてたなんていけてないです。誰からの情報ですか？」

「いけてないは余計だったの。変な言葉覚えちゃってもう。まあ、なんて言うの？」

ほんとに灯台下暗しよねえ。だってさ、その情報、まさか身内が持つてるなんてワタシだって思いもよらなかったもの」

フォルの言葉に、むっとして見せるルビス。

そして改めて、言葉通り思いもよらないことを口にした。

ブラッドも、思わずそのきつめの瞳を丸くする。

「身内？ まさか、私たちと同じイシュテイルの誰かが知っていたとも言つつもりかい？」

「うん、そう。でもって、誰かっていうと、ダイアンちゃんなんだけど、黙ってたこと怒っちゃ駄目だよ？ こうして私たちが無茶すると思っ、心配して言わなかったんだから。もう遅いんだけどさ」

ルビスは、ブラッドの問いに答えた後、バツが悪そうな表情を浮かべる。

ちなみに、ダイアンことダイアン・フローレス・金剛は現在、

同じく年代のイシュテイルの子達と共に、レジャイラ・ガイアットが静養のために長期滞在しているアーヴァイン王国にいる。

だから文句を言いたくて……もとい、詳しく聞こうにもすぐには聞けないわけなのだ。

「分かっているよ。別に怒っているわけじゃないさ」

それよりも、心配な気持ちがあったとはいえ、その事を話してく
れなかったという寂しさが、

ブラッドの口調を強くさせたのだろう。

それも分かっているからこそ、フォルは庇うように口を開いた。

「うむむ。黙秘し続けてたわけですね。でも、心配ってことは、
ここに何か危険があるってことなのですか？ ガイアットさまの
霊所なのに？」

「うん、どうやらそうみたいね。これって渋るダイアンちゃんに
無理言つて訊いた話なんだけど、

ガイアット様が留守なのをいい事に、たちの悪い『神型』の魔精
霊が棲みついちゃってるみたいなの。これは、よくは教えてもらえ
なかったんだけど、お城の方でも問題になってたみたいだし、信憑
性は高いと思うわ」

ルビスは、聞き出した情報を辿るように、少し天を仰ぎつつそう
説明する。

ちなみに神型の魔精霊とは、フォル達『人型』の魔精霊や、人以
外の姿形を取る『獣型』の魔精霊の上位種にあたる。

根源魔精霊も、この『神型』だ。

「となると、その魔精霊がケイクンを？」

再びブラッドがそう言っていると、ルビスは頷くでも否定するでもなく、微妙な反応をした。

（第16話に続く）

第16話

「となると、その魔精霊がケイクンを？」

ガイアットに棲まう、神型の魔精霊。

それが、ケイ失踪の鍵となるのか。

そう思いブラッドがそう問うと、ルビスは頷くでも否定するでもなく、微妙な反応をした。

「それがね。全く関わってないってことはないと思うんだけど、はつきりしないのよね。

まず、ダイアンちゃんが何でこのことを知ってたかかってことにつきるのよ。

ほら、今はお母さんと一緒にガイアットから離れて静養してるせいなのか平気らしいんだけど、ダ

ダイアンちゃんって病気にかかってたでしょう？」

「【神が愛せし病】か。『選ばれし澄んだ魂を持つものが、神の御許へと誘われる』と喻えられ恐れられた病。説明してみれば、喻えでもなんでもなく、その通りだったというのだから皮肉なものだけどね」

呆れたようなブラッドの声。

ルビスも同じように頷いて見せて、言葉を続けた。

「うんうん、さすが詳しいね。で、ここまできれば分かると思うけど、

ガイアットの塔にいたのが、その魔精霊らしいのよね。そんなわ

けだから、

ケイさんはその病気を治すというか、その魔精霊を説得するために、塔に登ったらしいの。

それで……」

「それ以降、ケイは戻ってこない、つまりはそういうこと、か」

言い渋るルビスを補完するように、今まで話を聞いていたことを証明するがごとく、

ガイアット仮面はそう纏め、しみじみと頷いた。

「待つて下さいです。じゃあケイさまはこの塔にいるですか？
フォルが生まれる前からずっと？」 「……」

もう一つ口にするのも憚られる可能性をあえて避けているのか。
そんな事あるはずないと思っているのか、フォルの問いかけに思
わず押し黙る一同。

だが、それも長くは続かず、やがてルビスが意を決したように、
口を開いた。

「もう二年近くも魔精霊を説得してる、だったらいいんだけどね。
目を逸らさないで。もう一つの可能性から」

そして、その可能性を言葉にしようとして。

フォルの純粹で真っ直ぐな、琥珀色の瞳に耐えられずに、ルビス
は結局自らでその目を逸らしてしまう。

再び、辺りは静寂に包まれて。

その静寂を破ったのは、ガイアット仮面だった。

「もう一つの可能性。成る程、分かったぞ」

あまりにもあっけらかんと、明るくそう言うので。
ルビスはびっくりしてガイアット仮面を見上げる。

そして、それを止めようと思う前に、ガイアット仮面は言葉を続けた。

「確か、『神が愛せし病』は、かかったものの命をもれなく奪うと訊く。

それが、そのダイアンちゃんといったか？ その子がすっかり無事ってことは、

ズバリ、何か不測の事態がお互いに起きたのだろう。

例えば、そうだな。強者を喰らい異世界へといざなうと言われる伝説の魔獣、クリッターが現れた、とかな」

クリッター。その名を冠す魔獣の、深遠を映し出す眼まなこにかなった強きものは、

痛みを伴い喰らわれ、どこかも分からない異世界へ攫さらわれるという。

それは、傾いた世界の天秤を元に戻すための救世主を、その世界に送り込むための、

世界の理が創りたもうた神秘だとも言われている。

逆に、出会ってしまい、その眼にかなう強さがなくば、無残に噛み殺されるらしい。

「その魔精霊とケイ……いや、他にも仲間がいたのかもしれないが、

一悶着くらいはあったのかもしれない。お互い無類の強さを誇っていて、

きっとなかなかの戦いだっただろう。

その強者同士の戦いに、強者の血を好むクリッターがよってきて、も不思議ではないな。

帰ってこなかったということは、きっとそのクリッターに異世界へと招待されたのだろうさ。

……それがもう一つの可能性、違うかな？」

「なるほどお。フォル、どっちかが正しいような気がしてきたです」

まるで、その場面を見ていたかのような臨場感すら窺わせるガイアット仮面。

フォルはそれを聞いて単純に信じ、感心していたが。

ルビスは、自分が思っていた考えたくない可能性とは別の事を言われ、

安堵している自分を感じつつも、どうしてこの人はここまで詳しいのだろうか、と思っていた。

名前も素顔も隠していることで、隠しておかなければならない何らかの理由があるだろうことは分かっていたが。

こうなってくると、流石にガイアット仮面の正体が気になってくる。

それを訊くべきか否か、ルビスは視線を彷徨わせ。目に入ったのは、無表情に近いブラッドの作り物のように整った、白い表情。

だが。その無に近い表情の中には、フォルと同じように、ガイアット仮面の言葉に疑問を持っている様子など、微塵もないように見えた。

なんとなく、誰であるのか分かっているかのようなそんな態度すらある。

(まさか……)

ルビスは、再度ガイアット仮面を盗み見た。全身、緑に統一された、舞踏会に盗みにも向かうがごとき傾いた服装。

ガイアットの一族であるという本人の言葉。そして、透けるような翠緑の髪に、仮面に隠されて見えにくいがおそらくは髪と同じ輝きを放つその瞳。

ルビスの中で、今まで挙げた特徴に見事に当てはまりそうな人物は限られていた。

だが、もしガイアット仮面が思っていた通りの人物であるのならば。

危険だと聞かされている塔の中に入る理由がなくなるはずであつて。

やがて、おやつ時になろうかという時分。

そんな会話をしながら一行はガイアットの塔へと辿り着く。話に夢中でフォル達は気づかなかったが、その途中に何かに遭遇することはなかった。

そのせいで思っていたよりも早く到着したのもあるだろうが。

「確か、この扉をガイアット一族の俺様が開けるのだったか？」

「うん、そうですね。お願いするです」

「……………」

「……………」

この塔の中に入ることに全く躊躇しないガイアット仮面にルビスはやはり勘違いだったのかと、深く落胆する。心なしか、ブラッドも沈んでいるように見えて。

だから。

その時ガイアット仮面が不用意に口にした言葉を。ルビスはその時、気づくことはないのだった……………。

(第17話につづく)

第17話

ガイアットの一族にしか開けられないと言われる塔の入り口は。ガイアット仮面の自宅の扉を開けるような気軽さで簡単に開いてしまった。

中に入り、まずフォルが目にしたのはその広さ、鏡のように空間を反射投影する大理石の地面だ。

上へと繋がる階段の前には象牙のアーチがあり、四方の壁には白亜の柱が整然と並んでいる。

そして、要所要所に、まるで星々のように散りばめられた十三種にも及ぶ宝石（何気にフォルは数えてみた）があった。

地の根源を祭る場所であるからには当然であるとばかりに存在するそれらは、

フォルが立っている一区画だけでも万年金欠だと嘯くルビスが卒倒しそうなほどの価値があるに違いがなかった。

だが、フォルが目にしたのはそれだけではない。

「むむう。どうやらこの場所は比較的多く人が来てるみたいですね。

年に一度みんなでお仕事で来る頻度よりは断然多いです。

それに、フォルが目息したいのは、他の宝石と比べて真珠だけに多いことです」

「ほほう？ フォルちゃん、よいことに気づいたかもだぞ。それはひょっとしたら非常に重要な意味合いを持っているのかも
しれない」

思ったことを口にしただけのフォルの言葉に、
うむうむと頷いて真面目に答えているガイアット仮面。

何だか褒められた気のするフォルは嬉しくなって。

それでもそんな宝石たちを傷つけないように慎重に歩みを進めつ
つ、改めて辺りを見回す。

細かい宝石の配置は別として、造りは変わらないように見える地
上二階。

年一回大所帯でここに来る時は、ここから三つ昇った、祭壇のあ
る五階までしか上がらないが、

今回はそこから頂上までは軽く倍は昇る必要があった。

多人数なせい、五階まで昇るのに半日近くかかったのをフォル
は覚えている。

だが、この面子ならばたとえ倍近くあつたとしても、日没より前
には頂上へ達することができらるうと思われた。

塔に入る前までの道のりでもそうだが、何故今回はこんなにも早
くつけたのか。

それは、自由に動けるからという理由だけでもないのだろう。

その答えは、ブラッドが口にした。

「おかしいね。ここは普段から様々な魔物たちや魔精霊たちが封ぜられ棲家としている場所のはずなんだが……何故、こんなにも静かなんだ？」

「何かが起こる前触れとかじゃないでしょうっね。笑えないわよ」
「……」

ルビスも、真面目な顔でそんな事を言う。

城下町にいた時に現れた魔物、届いてきたその声。

その事が気になっていたのは確かだった。

何故そう思うのか。

それは、フォルにはあの声が聞こえてから誰かにつけられている感覚が僅かにあったからだ。

フォルには、野生の勘とでも言うべきものが備わっている。

とは言え、まだまだ未熟なフォルたちに気配を悟らせない程度のことならば、

三騎士クラスのものならば平気でやってのけるのだから、
実質あまり意味は成さないのかもしれないが。

と、そこで、緊張感漂う空気を破るように、ガイアット仮面が口を開く。

「何もいないで苦労しないのなら、それでいいのではないかな？
それに、君たちはお城を抜け出してきたのだろう？ せめて日没までに帰る算段をつけねば、

国をあげての搜索がかかってしまっんじゃないかね？」

確かに、そのガイアット仮面の言わんとしていることは正論だろう。

「それもそうね。黙って来ちゃったわけだし」

ルビスが苦笑して頷くように、それに異を唱えることもなく、一行は目的の事だけを考えて、上へ上へと昇っていくのだった……。

そして。

五階の祭壇をそのまま通り過ぎ、十階も超え、更に上がった時のことだ。

先程のものとは明らかに違う、洗練され研ぎ澄まされた気のようなものが辺りに漂い始める。

それは光の魔力セザールのようで、ある意味魔力の塊でもあるフォル達三人に、

少なからず影響を及ぼした。

特に、相反する最たるもの、闇の魔力エクスレリオを主とするブラッドは、既にその足取りが鉛のように重い。

「大丈夫ですかブラッドちゃん？ つらそうです」

「ふつ。このくらい……オリビナくんに纏わりつかれるの比べたら、大したことじゃないさ」

だがブラッドは、年長の意地でもあるのか、伺い見てくるフォルに、微かな笑みで答えた。

「これだけ充満する魔力が強いつてことは、やっぱりその魔精霊、いるのかな」

「そのようだな。いずれにしても、終点だ」

多少なりとも影響を受けているフォルやルビスと比べても、至って変わった様子もなく平然としているガイアット仮面は、そう言って前方を指さす。

今までであった螺旋階段がなくなり、代わりにあるのは幅広く連なる真っ直ぐの階段だった。

その先には、入り口にあったものと同じ、ガイアットの一族にか開けられないという、

封印された重々しい、深緑の扉がある。

その向こうには、五階にあったものより一際大きな祭壇があり、そこには、青銀色の巨大な鳥の魔精霊が座していた。

フォルたちにははっきりと分かる、まさしく魔精霊にとっては神とも呼べる神型の魔精霊。

空の夢幻を移すかのような、その神型の魔精霊の視線に圧され。

フォルたちは息すらできないほどに立ち尽くすしかなかった……。

(第18話につづく)

第18話

空の夢幻を移すかのような、その神型の魔精霊の視線に圧され、フォルたちは息すらできないほどに立ち尽くす。

しばらく奇妙な、それでいてフォルにとっては最近感じたことがあるようなお見合いが続いた後。

何の躊躇もなく歩みを進めたのは……ガイアット仮面だった。

「ごきげんよう。風の魔精霊^{ヴァーレスト}、アリエイル・ウーラ。

今日は互いの蟠りを解消できる、良い日にしたい所だな」

そして、目の前の魔精霊に負けないほどの威圧と高潔さを持って、そんな事を言う。

「な、何で？ どうしてアンタ、その名を知って？」

「あれ？ ガイアット仮面さん、鳥の魔精霊さんと知り合いだったですか？」

「……」

混乱や驚きが極みに達しているルビスと、何だかよく分からずに聞いているように見えるフォル。

黙して語らないブラッド。

対してガイアット仮面は、ゆっくりと方へ振り向くと。

仮面をしていても分かるくらいに柔らかな笑みを浮かべた後、すっとその表情を引き締めた。

「僕が何者かはすぐ分かる。それより気を抜くな……来るぞっ！」

それから、ガイアット仮面がそう叫んだ瞬間。

地震でも起こったかのように、地鳴りが発生して。

それまで何も語ろうとしなかった、アリエイルと呼ばれた魔精霊が低い唸り声を上げる。

地鳴りはどんどん大きくなり、立ってられないほどの粹にまで達して。

大理石の地面を突き破り現れたのは、あの星の形をした黒いものだった。

「ミツケタゾ！ ミツケタゾケイ！ キョウコソニギリツブシテ
クレルツ！」

それは機械的な口調でそう叫び、その身体を大きく開き、全身を震わせている。

「……黄泉の魔物、『ヴィアロツテ』か！ これはまた随分と大物を釣ったものだ！」

ガイアット仮面は苦笑いを漏らし、フォルたちを守るように自ら
ヴィアロツテと呼んだものの元へと歩み寄る。

ガイアット仮面が一步一步進むたびに、マントから生え出したか
のように出現するのは、

三叉の『デスサイズ』だ。

本人が言っていた通り、ガイアットの一族が好む得物の一つであ
る。

「オカシイ、ケイのノニオイ、オマエカラモスル。オマエガホン
モノノケイカ？」

「だったらどうした？」

「コロス、ニオイノスルヤツ、スベテミナゴロシダ！」

ヴィアロツテは、ガイアット仮面の言葉を受け、
吐き出すようにそう叫ぶと小刻みに身体を震わせた。

すると、それに合わせて大気がうねり、手の中央下にある昏い口
元に、

いつか見た灼光が集まりだす。

それは、城下で、フォルたちを襲った一撃。

「させるかっ！」

ガイアット仮面は、その一撃を繰り返される前にと、
低い姿勢をとってヴィアロツテとの距離を限りなくゼロにする。

そしてそのまま、体当たりをするようにヴィアロツテに突っ込んだ。

「チガウ、オマエ。ケイハ、モットハヤカッタ」

「何だどっ？」

ガイアット仮面の初太刀は、まるで木の葉を相手にするかのよう
にひらりとかわされてしまった。

触れることもできずに体勢を崩されたガイアット仮面は、
ヴィアロツテと立ち位置が入れ替わる形になって。

「キエロツ、【ヴィア・ブレイザー】ッ！」

「っ！」

刹那、視界が無くなるほどの光が辺りを覆い、続いて恐ろしいま
での静寂が満ちる。

フォルが、恐る恐る目を凝らすと、そこには薄水色の空が見える
ほどの大穴の開いた塔の壁。

その縁には、ゆらゆらと佇むヴィアロツテの後姿があった。

ガイアット仮面の姿は、塔の壁とともに、跡形もなく消えてしま
っている。

塔から落ちたのか、あるいは。

「ツギハダレダ？ オマエカ？ オマエカライチバンツヨク、ケ
イノニオイ、スル」

「……っ」

そして、そこでようやくその虚ろな視線が、言葉が自分に向けられて
いることに気づいたフォル。

目まぐるしく変わる展開に、頭が理解していないのもあるだろう
が。

それより何よりも、動けなかったのだ。

城下で見た時は離れていたからこそ、だったのだろう。

こんなにも怖いと思える、禍々しい気を持つ相手に会うのは。

フォルにとって生涯初めてのことだった……。

(第19話につづく)

第19話

こんなにも怖いと思える、禍々しい気を持つ相手に会うのはフォルにとって初めてだった。

身体が震え、全身が総毛立つのを抑えられそうにない。

「何よ。やばいんじゃないの。ガイアット仮面さんはかっこつけてた割にはもういないし。」

塔の下に落ちちゃったのかな？

安否確かめてる暇なさそーなんだけど、やっぱりアレは黄泉の魔物の一種？」

だが、そんなフォルを支えるように、気持ち庇うように、フォルの右隣に並んだのはルビスだった。あっけらかんとしているように見えるが、その唇は乾ききっている。

フォルと同じくらい、恐怖を感じているだろうことは間違いなかった。

「ああ、そうだよ。あれは名のある黄泉の魔物だ。」

……以前、ケイクンが参加したと言う建国祭では二名の神型の魔精霊を殺したという逸話もある」

そして反対側にすつと立ち、極端に刃が歪曲している、通称死神の鎌と呼ばれる愛用の得物を構え、ブラッドはそんな事を言った。

二人に比べ、冷静に見えるが、言ってることが真実であるのなら、

魔精霊としての力であればやっと人型の魔精霊に足を踏み入れた程度のフォルたちとしては、絶望的とも思える台詞だ。

「ホウ？ ヨクシッテルジャナイカ。ナラバ、ゴキタイニソエ、ミセテヤロウッ！」
「っ！」

その瞬間、黒く巨大な星に無理矢理取り付けたかのような虚ろな瞳をギラつかせ、

ヴィアロツテは中空に浮き上がり、凄まじい速度で、今まで警戒の色を消さぬまま唸り続けていたアリエイルめがけて突っ込んでくる。

「ギイッ！」

とつさに羽ばたきかけるが、それを狙っていたのだらう。

ヴィアロツテは流れるように浮き上がりアリエイルの首筋を掴んだ。

苦しそつに漏れるのは、アリエイルの鳴き声。

アリエイルは必死にもがき振り払おうと羽ばたき続けるが、それは儂い抵抗にすぎなかった。

さらに腕に力を込めるようにヴィアロッテは強くアリエイルを締め付け……

やがて、それを止めることもできずに見ていることしかできなかったフォルたちの前で、
驚くべきことが起こった。

気づけば、ヴィアロッテの身体が擦れ、アリエイルの身体と融合し始めたのだ。

ヴィアロッテの身体は鋭く変形し、アリエイルの姿は漆黒の兜を被ったような姿に様変わりしている。

「ギイイイイツ！」

そして。

アリエイルは咆哮を発し、フォルたち目掛けて襲い掛かってきた。

「くっ」

それに初めに反応したのはブラッドだった。

翼をはためかせ、鋭く大きな爪を、ギリギリの所で鎌で受け止める。

「ぐ……あっ」

だが、ブラッドはこうした近接戦闘ではなく、後方支援の戦いを主としていた。

この面子ならばそれはフォルの役目であったのだが、未だ動けないでいるフォルを庇ったのが裏目に出たのだろう。無残にも鎌は二つに折れ、ブラッドは抉られるように弾き飛ばされる。

ブラッドは、邪険に扱われ捨てられた人形のように、壁にぶつかって倒れ伏した。

そのままブラッドは、ピクリとも動かない。

「こ、このっ」

続いて動いたのはルビスだった。

ルビスは、僅かな間で、金の魔力グルックによって生み出された銃から、三発の銃弾をヴィアロツテに向かって打ち込む。

しかし。

握りこぶしほどもあるルビスの弾丸はいとも簡単に、避けもしないヴィアロツテの黒光りする身体に弾かれてしまった。

当然のようにヴィアロツテの身体には傷一つついていない。

「そ、そんなんっ」

呆然とするルビスに向かってつき返されるように向けられるのは、すっかり様変わりしたアリエイルの顎。

「きやつー！」

まずいと思った時には、その顎から繰り出される青白い輝き放つ閃光がルビスを貫いていた。

ルビスは悲鳴を上げ、その運動に従ってきりもみしながら、ブラッドと折り重なるようにして転がる。

受けたのは胸、だろうか。

ルビスは銃を取り落とし、やはりそのまま動かなかった。

「あ、あ……ブラッドちゃん、ルビスちゃん。ううっ」

何もできずに立ち尽くすフォルは、悔やむように、ただそう漏らす。

自分が外に出ようなんて思わなければ。

自分のせいで、二人はこんな酷い目にあっているのだと。

自らを恨み、後悔する気持ちだけがじわじわと広がっていく。

「アトハオマエダケダツ！」

そして、そんなフォルに追い討ちをかけるように脳髄にまで響くようなヴィアロツテの声。

フォルはそれに震えるように、無抵抗のまま顔を上げて。

すぐ目前に迫るのは、鋭いアリエイルの顎下にある嘴。

それはきつと、フォルの身体をいとも容易く串刺しにするのだから。

フォルは自分のことなのに、他人事のように考えていて。

その鋭い嘴は。

しかしフォルを貫こうとする直前で、何故かぴたりと、その動きを止めた。

「ナ、ナゼダ？ カンゼンニシハイシタハズツ」

驚愕と焦りの混じった声をあげるヴィアロツテ。

「………？」

それを、空ろなままではかんと見ていると、急に胸元がもぞもぞとして。

そこから生きているかのように鎖つきの一枚羽のアクセサリーが飛び出した。

くるくると回りながら宙に浮かぶそれは。

シトリーにもらった友情の証。

ふとフォルが顔があげれば、そのアクセサリーと同じ色合いを持つ、
大きな大きなアリエイルの翼が目に入る。

「シトリイ、ちゃん？」

「……」

フォルは、アクセサリーを見て、アリエイルを見て。

思わずそつ咳いて……。

（第20話につづく）

第20話

「シトリー、ちゃん？」

「……」

フォルは、羽根を象ったアクセサリーを見て、アリエイルを見てそう呟く。

最初にどこかで見たような気がしたのは。

アリエイルにシトリーと同じ気配も感じたからなのだろう。

アリエイルは、その事に気づいたフォルに優しく微笑んでみせる。

その表情が見えたのは、アリエイル自身がまとわりつくヴィアロツテめがけ、

長く尖った尻尾を、自らの眉間に突き立てたからだ。

「ギヤアアアッ！」

一拍遅れて悲鳴を上げたかと思うと、飛び出すようにアリエイルから離れるヴィアロツテ。

アリエイルは、それを確認してから自らによって作られた血溜まりに沈んだ。

フォルは倒れるような勢いでアリエイルに駆け寄った。眉間から吹き出る血を止めようとその手を添えるが、

小さすぎる手でそれを止めるのは不可能だったろう。

「……ッ、ココマデバカナヤツダッタトワナ！」

吐き捨てるように響いてくるヴィアロツテのそんな声に、フォルははっと振り返る。

そこには、アリエルの尾に貫かれて尚、その禍々しい気を失わないヴィアロツテが幽鬼のように宙に浮かんでいた。

そんなヴィアロツテを見て、フォルの中に漠然と疑問が生まれる。

「どうして、どうしてこんなこと、するんですか？」

フォルは思うままに、そう聞いてみた。

それを耳にしたヴィアロツテは途端、可笑しそうな笑い声を上げる。

「ドウシテ？　クククッ。ケイモオナジコトヲキイテイタナア？　ナンドデモイッテヤルヨ。オモシロイカラダ！　ソノ、ゼツボウニソマッタヒョウジョウガナ！」

ドクンッ！

そして、ヴィアロツテがそう叫んだ瞬間。
息を吹き返して波打ち始める鼓動のように。
フォルの頭の中に、一つの光景が浮かび上がった。

それは、雨けぶる橙色の世界。
フォルが、頻繁に見る悪夢の世界に酷似していた。

いつもは、ぬめるような赤と、鉄錆を擦り込ませたような冷たい
ぬくもりの中にいるのに。

今日の夢は、暖かった。

橙に染まる世界の中、翠緑に燃えるヒトに包まれている。

『さよなら……』

そのヒトは言う。

涙を溜めてそれでもその瞳の色失わない、やさしい風貌で。

流れ落ちるもの。それは涙だけではなく。

もう留めておけないことが分かっただけでも。

堪えるように、そこに広がる霞んだオレンジの空を見上げ……あ
あ、と息を吐く。

深く深く、息を吐く。

そして、納得するのだ。

悪夢じゃなくても、やはり『フォル』は、死ぬのだ、と。

それからそのヒトに、『フォル』は何かを言った気がするのに、
それを知覚することはできなかった。

『ありがとう……』

ただその人の、そんな言葉が、耳に、心に、落ちる涙とともに沁
みて。

消えないように、ずっと願う。

この想い、その言葉。

そしてそのヒトの全てを。

夢から醒めても、消えないように。

夢の残滓の中で、ただそれだけを望み求めている『フォル』がい
た。

オレンジ色に染まる、この世界で……。

「……」

気付けば、元の世界。

何故そんな光景が見えたのか。
フォルには分からない。

ただ、一つだけ分かったことがある。

レジャイラによって生み出されたイシュテイルが必ず持っている、
その誕生石を表す輝石。

それは、個々によってついている場所が違っていた。

それが何を意味するのか。

その光景と重なるようにして思い起こされるのは、
今朝見たばかりの、悪夢ではない、夢だ。

大切な人が泣いて抱きしめてくれる、夢。

それがもし、夢じゃなかったとしたら？

フォルが今までずっと忘れていた、輝石に秘められた秘密だとし

たら？

……ピシリッ。

そう気づき、思い出した瞬間。
何かが軋み、ひび入る音。

そして。

それが自分の輝石、ムーンストーンが立てる音だと分かった時には。

フォルは完全に意識を失っていた……。

(第21話につづく)

第21話

「ウギヤアアッ！」

凄まじい断末魔の声がして、意識を失っていたルビスは目を覚ます。

その際、胸元に鈍い痛みを感じて顔を顰めると、そこには衝撃で解体されてしまっている予備の銃があった。

どうやらこれのおかげで助かったらしい。

改めて辺りを見回し、まず目に入ったのは。

今まで見たこともないくらい瞳を見開き慄然としているブラッドの姿だった。

アリエイルの爪に引き裂かれて、目を覆いたくなるような風体をしてはいるが、

よく考えてみたらイシユテイルは地の魔精霊なのだ。

見た目にそぐわず頑健なのが取り柄なので、ブラッドもこうして起き上がっている以上、

ルビスとさほど変わらない理由が何かで無事だったのだろう。

そんなブラッドも気にはなったが、先程の叫びと、ブラッドの視線の先が気になったので、

ルビスは同じようにそちらに視線を送ってみた。

「な、何？ あれは？」

ルビスは呟き、そのまま言葉を失う。

目の前には、アリエイルより二回り以上の大きさはある、燃えるようなオレンジ色の鬣を持つ魔獣がいた。

その様相は、百獣の王とでも言い表すべきだろうか。

見ているだけで両手で自らを掻き抱きたくなるほどの圧倒的な存在感。

大樹のごとき太さのある四肢と、一つ一つが凶悪な殺傷能力を秘めている大剣のような爪。

ルビスたちの方からは背を向けているのでその表情は分からないが、

その背に揺らめく大きな三本の尾……生ける大蛇であるそれは、滑らかな曲線を描いて三本ともが壁に礫るようにヴィアロツテに噛み付き押さえつけていた。

「獣王。一昔前までのユーライジアの世界を蹂躪し続けた剛の者、魔族の一人。いや、その仔か。」

とんでもない前世を、秘密を持ったものだよ。フォルくんもね」

「フォル？ あれが？ まさか記憶、ううん、封印が解けてるっていつの？」

前半よりも後半の台詞にルビスははっとなりじつと目を凝らす。すると、お腹の部分、オレンジ色の長い毛並みの奥に、一筋のひびが入った輝石が確かに見えた。

「そうか。ルビスくんも記憶を取り戻していたんだったね。……
なら話は早い。」

見て分かる通り、あれがフォルくんの前世とも言つべき姿だよ。だが、記憶の封印を悪戯に刺激されてうまく制御できずにいるよ
うだけだ」

それは、私たちがふがないせいもあるだろうが。
ブラッドはそう纏め、再びじつとフォルを見守る。

「ちよつと、ナニ達観しちゃってんのよ。あのままじゃまずいん
じゃない？」

「ああ、きつと力尽きるまで暴れ続けるだろうね。
だが、それを止めるのもままならないのが正直なところだね。
おそらく、敵味方の区別すらついていないだろう……来るよ！」

淡々と現状を述べていたブラッドは、急に顔つきを変え有無を言
わさずルビスの肩を掴んでしゃがませる。

それにルビスが文句を言う暇もなく、辺りの空気が波打ち、環状
にたわむのを感じた。

もう一度フォルの方を見れば、まるで太陽の光がそこにあるかの
ような茜色の輪が、

フォルに集まっているのが分かる。

「……………【ユイズ・ヴォガ・レンジ】ッ！」

フォルとは思えない重低音の力ある言葉が、部屋中に反響し木霊する。

その瞬間、圧縮されたオレンジ色の魔力が一層輝きを増し熱を帯びて。

しゃがんだルビスたちの頭上、すれすれを凶悪無比な威力を秘めた波動の輪が通過する。

「ウグアアアアッ！」

その直撃を受けたヴィアロツテは、吐瀉物のように壁に叩きつけられ

、星の形を保っていらぬほどの不安定な形状で地面にずり落ちた。

「寝た子を起こしてしまったようだね。問題は、フォルくんをどう止めるか、だが」

「うーん、どうしょ。……………ん？ あれ、何だろ？ 何か聞こえない？ ドン、ドンッって」

急に耳を欻ててきよるきよるしだすルビス。
それは、フォルがやっているわけでもなく、もはや満身創痍のヴ
イアロツテがやっているものでもなさそうだった。

まるで心音を刻むかのような、身体の芯に響く音は。

じわじわと近付いてくるかのように、その大きさを増していく。

ブラッドは、それに今までにないくらいの焦燥感を覚えた。

嫌な予感がする。

それは、目の前のヴィアロツテや、獣王化したフォルですら霞ん
でしまいそうな、

不安を通り越した絶望だと。

「あれは？ ルビスくん、空が……」

「えっ？ な、なんで？ 夜になってる、うっそ。まだ日が沈む
には早いよっ」

「違う！ あれは、夜の闇じゃないっ」

ブラッドは言葉を続けようとして。この部屋そのものを乱暴にノ
ックされているような音に、

潜めるように言葉を飲み込む。

「ガールルルッ……」

獣王化したフォルもソレに気づいたらしい。
低く這い蹲るように警戒態勢をとる。

「ナ……ナンダ？ コ、コンドハナンダヨッ！」

ヴィアロツテは半狂乱状態でそう叫ぶ。

何者かの足音のような、鼓動のようなその音は、ますます大きくなつて。

忽然と。

ヴィアロツテの背後に赤いものが開けた。

それは、何者かの巨大な舌だ。

壁と一体化したそれは、まだ気づいていないヴィアロツテに向かって、いきなり齧り付いた。

「ぎいっ！ ギイヤアアアアッ！」

吐き気を催す破砕音。

あるいは咀嚼音と、魂消るようなヴィアロツテのあっけない最期の声。

ルビスは思わずそれから視線を逸らした。

「あ、あれはっ……く、クリッター？ まさかっ」

すぐに隣で聞こえる悲鳴に近いブラッドの声。

「クリッター？ さっき話してた魔物のこと？」

虹泉に棲んでるっていう出会ったら最後一巻の終わりだって言う？」

そう問うルビスの眩きは。

次から次へと起こる大事についていくのもやっとで。

啞然、呆然と、乾いたものだっただろう……。

(第22話につづく)

第22話

それは、伝説というよりも御伽噺に近い。

クリッターに食べられてしまうから、夜遅くまで外で遊んでいてはいけませんよ、といった類の。

だが、ルビスはその御伽噺めいた化け物が、実在していることも知っていた。

強者の魂を求め、喰らうことで異世界に救世主を送り込む、世界のバランスを司る大いなる存在の使い魔。

ケイたちの失踪の理由はそのせいではないのかと、ガイアット仮面に諭されて。

ダイアンに、この塔でケイが行方知れずになった事を聞かされてから、

僅かな可能性の一つとして考えていたもの一つだった。

ただ、それよりも。

「ねえ、どうしてブラッドはアレがクリッターだって分かるのよ？」

「……こつ見えても前世は長生きさせてもらっていてね。喰らわれたことがあるんだ、あれには」

ゾツとしない、ブラッドの言葉。

それに対し返事をすることもままならず、ルビスは改めてクリッ

ターのほうを見やると、

今まで壁と一体化していたそれは、にゆるりと壁から抜け出し、粘土細工を捏ね回すような音をたて、黒い、どこまでも黒い、粘土人形のような姿にとって変わる。

その色は、ヴィアロツテの身体よりも、虚空の闇よりも黒い、そんな黒さだった。

ヴィアロツテの痺れるような殺気とも、アリエイルの研磨された佇まいとも、

獣王化したフォルの圧倒される存在感とも違う。

寂寞すら漂わせるその姿は、それでも抗えない絶望を体現したかのような、

見ているだけでおかしくなってしまうような、そんな感覚がある。

そんなクリッターを見て、初めに痺れを切らしたのは、フォルだった。

次の獲物を探すように、のそのそとそれでも確実に近付いてくるクリッターに向かって鋭く吼えると、再びオレンジ色煌めく魔力を、その鬣逆立てて集め始める。

「く、待て！ フォルくんっ、迂闊に刺激するなっ」

焦ってブラッドがそう叫ぶが、フォルにその声は届かない。

「【ユイズ・ヴォガ・レンジ】ッ！」

辺りに、都合二度目の力ある言葉が木霊し、
茜色輝く輪が、波紋のように広がってクリッターに迫った。

「でいるでいる！」

だが、クリッターは金属を擦り上げたような、何かを吸い上げる
ような不快な音を発して……

その瞬間。キーンツと何かが軋み弾かれるような音とともに、
フォルたちの視界を拡散されたオレンジの光が灼いた。

途端、骨まで響く激烈な振動に襲われる。

「こ、これは、フォルくんの……あああっ！」

「つきゃあああっ！」

「ゲガアッ」

それが、フォルの放った橙色の魔法が跳ね返されたものと分か
った時には、

逆流する凄まじい突風が生じ、ブラッドもルビスも為す術なくそ
の風と波動に押しつけられるように吹き散らされた。

その後につき、獣王化したフォルと倒れ伏したままのアリエイル
もルビスたちの前まで飛ばされてくる。

フォルは、その衝撃で気を失い獣化が解けてしまったのか、元の

姿に戻ったまま身じろぎせず。

身体を震わせて呼吸しているアリエイルは、かろうじて生きていることが分かる程度だった。

それを半ば茫洋として見つめ、ルビスがふと顔を上げれば。

そこには何もなかったように、それでも焦らすようにじりじりと近付いてくるクリッターの姿がある。

「……ルビスくん、一つ、頼みたいことがあるんだが」

と、その時。

すぐ近くからブラッドのそんな声がして、ルビスはそちらに顔を向ける。

「私の……この輝石を破壊してほしいんだ」

「な、何言ってるの！ そんなことしたらっ」

驚き、再度ブラッドを見据えると、彼女はどこか儂い微笑みを浮かべていた。

「フォルくんのように前世のあるべき姿に戻れるはずなんだ。

あれに立ち向かうには、もうそれくらいしか手はないだろうからね」

「自分が何言ってるか分かってるの？ 輝石を壊すですって！ そんな事したら、あんた、死んじゃうかもしれないじゃない！」

輝石を壊すことがすなわちどうということなのか。

それは、ブラッドの言う通り前世の回帰だ。

だが、それは、もうこの世には存在しないもの、なのだ。

それを留めている輝石を失えば、ブラッドの存在が消えてしまう可能性もあつた。

「分かっているよ、そんなことは。だが、このまま皆殺しにされるよりはいくらかはましだろう？ 何、心配はいらない。前世の私ならば本物の獣王にも負けない自信はある。クリッターの足止めくらいは可能だ」

ブラッドは強い意思を持って、ルビスにそう言う。
本気、なのだろう。

ブラッドは、ルビスたちのために命を犠牲にしてまで何とかしようと思っっているのだ。

それは、ルビスにとって、小さな驚きでもあつた。

普段から何を考えているか分からず、他のイシュテイルとも一線を置いているような所があつたからだ。

ルビスは、そんなブラッドを負けない真紅の瞳で見返し、大きく首を振ってから、

自らの太もも……輝石のある場所へと、銃口を突きつけた。

「絶対に嫌よ！ アンタに恩を着せるくらいなら自分がするわ！」
「……………」

顔色を変えるブラッド。

クリッターもすぐそこまで来ていて、もはや極限状態であるのに、子供の喧嘩のような睨み合いが二人の間が続く。

と。

「待ちたまえ、その儂くも美しい命。いたずらに散らすこともない」

どこからか、そんな声が聞こえてきて。

シュツと風切る音がし、部屋の中央、クリッターとルビスたちを隔てるように、

デスサイズが突き刺さった。

「でいるっ？」

それでも歩みを止めなかったクリッターは。

そのまま突き立てられたですサイズの所に近付いたかと思うと、何か、透明な壁にでもぶつかったかのように、激しく火花を散らした。

その光景に、ルビスもブラッドも呆気に取られ、見つめているし
かなくて……。

(第23話につづく)

第23話

塔の壁穴から覗く、赤み始めた空から颯爽と現れたのは、純白の翼を茜色に染める、ガイアット仮面だった。

背中にあるその翼は、さっきまでなかったもののはずで。

「間に合ってよかった。随分と飛ばされてしまったね。この翼がなければ天に召されるところだったよ」

朗らかにガイアット仮面はそう言うが、ルビスもブラッドも二の句を告げることができなかった。

その翼は、ガイアット一族のごく一部、王族しか持ちえない証のようなものだったからだ。

「にあっ。いたたた。あ、あれ？ フォル、一体何を」

と、その時。

自らが何をしていたのかも覚えていない様子で、フォルがよろよろと起き上がる。

そして、立ちほだかるように目の前に立つガイアット仮面に気づいて、声をあげた。

「ガイアット仮面さん！ 無事だったんですね！」

「勿論さフォルちゃん。君達を置いて俺様が死ぬわけにもいかな
いだろうか？ それに……」

ガイアット仮面は、にっこりと微笑んでそう言った後、改めてク
リッターを見据える。

「やっと会えたな、クリッター。この時を待っていたぞ。アリエ
イルどの！」

寝ている場合ではないぞ、これから、全てをお見せしよう！」「
「……っ」

ガイアット仮面の一喝を受けて、意識を呼び戻すように、アリエ
イルはその瞳を開けた。

立ち上がるうとしてままならないアリエイルを、側にいたルビス
が何とか支える。

今はもう、そんなルビスも、ブラッドもフォルも、ガイアット仮
面のすることを傍観するだけだった。

ガイアット仮面はそれに満足したように頷くと、何やら唱え始め
る。

それは、フォルの耳にも届かない小さきものだったが。
かろつじて何らかの歌だろうことは分かった。

途端、圧迫されるような重圧と、虹色に輝く光の奔流が、ガイア

ツト仮面を包み込む。

「クリッターよ、今まで数多のものを喰らってきたのだから？
その感覚、自らで一度味わってみるがいい。……【プレサイド・
レディタ】ッ！」

それは、フォル達が初めて見る魔法。

ガイアット仮面を覆う虹色の光は一層強くなり……その瞬間、
クリッター自身がヴィアロツテにしたように、宝石が散りばめら
れた地面の風穴が開いた。

クリッターは、落とし穴に落ちるようにそのまま姿を消し、辺り
には静寂が訪れる。

それは、ガイアットの一族が好んで使う、地属性魔法、【アース・
プレデター】と呼ばれる魔法に近いもののように見えたが。

「この力は俺様特有の力。この世界とは別次元に存在する力なの
だが、

アース・プレデターのように、取り込んだものを大地の糧にする
のとは違う。

取り込んだものの体験した記憶、思い出、これから体験する未来
を見せる、

なんていう、使い所に悩むものでね。

……まあ、何の因果か、今日それが大いに役に立つわけだが」

そして、ガイアット仮面がそんな解説なのか独り言なのか分からない台詞を口にはしていると。

フォルたちの目前に浮かんできたのは、吹き出しにくくられているかのような、何かの光景。

「え？ 何コレ？」

「……っ」

ルビスが、狼狽し、ブラッドが瞠目しているのが手に取るように分かる。

アリエイルも、最初は煩わしそうに翼を動かしていたが、

その映像がはつきりとしていくうちに、その動きをぴたりと止め、目を見張る仕種をしたのがフォルにも分かった。

見えるのはクリッターの記憶なのか、クリッターの見た映像なのか。

それともクリッターに取り込まれた者たちのものなのかは分からない。

だが、代わる代わる画面を埋めつくすように浮かんできた光景の一つに、

フォルの見知った顔があった。

「あれって、シトリーちゃん？」

今朝出会ったばかりのシトリイに似た、青銀色の長い髪と、空色の瞳を持つ人物が、同じくらい長いブロンドの髪の誰かと楽しそうにお喋りをしている姿が見える。

共に苦勞を分かち合い、冒険の旅をしている姿。

それは幸せなことばかりじゃないのかもしいけれど。

その人物が確かにそこに生きている証で。

気づけばアリエイルが、大粒の涙を流しているのが分かった。

「……一つ、長話をしようか。昔、このガイアットの塔には、神型の幼生である双つの魔精霊が暮らしていた。

だが、生まれながらにして神型の力を持つ魔精霊達の親は、そこにはいなかった。

親としては、子を置いてその場を離れなければいけない理由があったのだらうが……

とにかく、自分たちで生きるしかなかった魔精霊達は、

その生を保つため、他者の、それも穢れなき魂を持つものの生命力を糧にして生きながらえてきた。……それが、『神が愛せし病』

の始まり」

ガイアット仮面は、そこで一度呼吸を置いてアリエイルを、フォルたちを見やり、再度口を開く。

「ガイアットの雄であり、『ステューデント』の一人でもあるケイ・ガイアットは、その原因がこの塔にあることを突き止め、この場に足を運ぶ。そしてここに来て何があったのか……それはこれから分かるだろうが、

その後にようやく子の元に帰ることができた親が見たものは、愛し子、その片割れの、変わり果てた姿だった。

短絡的に考えれば、ケイがやったのだと、その親が思っても仕方がなかったのかもしれない。

事実、生死を司る仕事を請け負う、ガイアット一族であったケイは、その子を手にかけていたのだから。

理由がどうであれ、その事実になり狂う親に、長い協議の結果、ケイ側の人間は一つの話を持ちかける。

前王の秘術を使つての、その子を蘇らせる方法がある、ということをと。

生まれ変わりという一つ概念を持って「

ガイアット仮面は、そこで途切れるように言葉を止める。

口を挟むものはいない。

それは。

イシュテイルの誰にとっても重要な『秘密』であったから。

(第24話につづく)

第24話

「生まれ変わりの秘術は成功した。ただ、その秘術に労した魔力は膨大で、

命の篝火を移し変えるように、前王は床に伏せつてしまう。

その事と、自らの不行き届きを痛感していたこともあって、親は怒りを静めてくれた。

だが、ケイ自身ともう一人の子は未だ行方不明のまま。

その怒りを鎮めることに力を尽くしたガイアット王は……

ケイが何の理由もなしにそんな事をする人物ではないと考えた。

血の涙を流し、悔恨の果ての結果であっただろうことを今までの前例で知っていたし、

何より信じていたからだ。

そして、最近になってその理由、その可能性が何であるのかに気がついた。

虹泉に棲まい、強者の魂を異世に引きずり込まんとする伝説の魔獣、

『クリッター』が絡んでいるのではないのかと。

ガイアット王は、クリッターがケイと、もう一人の子を攫ったという僅かな可能性を信じ、

クリッター自身にそれを証明させるためにクリッターを呼び出そうと画策する。

そのためにはクリッターが誘われるような、強き魂がその場に集う必要があった。

その、白羽の矢が立ったのが、君だよ。フォル・ムーンウェル・琥珀」

ガイアット仮面が振り向いてそう言う。

いきなり名を呼ばれたフォルは、ほえ？ とはてな顔をする。

その、何も知らなかったというフォルの態度に、ガイアット仮面は渋い顔をし、言葉が続ける。

「そして、その思惑は思っていた以上の成果を挙げた。

前回の祭りの黄泉の魔物の生き残りにしかず、こうしてクリッターをも姿を現したのだからね」 「……あう」

ガイアット仮面の口調は責めるものではなかったが。

まるで災厄を呼び込む疫病神だと、今日の出来事は全て自分のせいだと言われているような気がして、フォルは衝撃を受けた。

厄介ごとを引き込む体質であることは、重々身に染みていたからだ。

だが、しゅんとするフォルよりも、それを見ていたルビスの方が、その言葉に苛烈に反応していた。

何の根拠と権利があってそんな事を言うのかと。

「あんた、言いすぎよ！ 全部フォルのせいだって言うの？ 一体何様のつもり！」

「……すまない。そうだな。むしろこんな悪巧みを誘導させたガイアット王を責めるべきだろうか」

それこそ何様のつもりだと、再び声を荒げようとしたルビスであったが。

しかしそれは、ブラッドによって止められる。

「ちょ、何よブラッド、止めないでよっ、いくらガイアット一族の人だからっ……て？」

今度はブラッドに喰ってかかろうとしたが、その止めた本人であるブラッドは、

ルビスの方を見ていなかった。

その視線は宙を彷徨っており、魔力によって映し出された光景を凝視していた。

「……ケイクン」

そして。そんなブラッドの陶醉した呟きに、ルビスだけでなくフォルも

、ガイアット仮面までもがはっとなって映像に注目した。

雑多に交じり合い、切り替わってゆくクリッターの記憶の中に、確かにケイだと分かる人物がいる。

すると、これもガイアット仮面の力なのか、その光景がどんどん近付いてきて。

視界一杯になって視点と一体化した時。

目の前に具現化して再現されているかのように、音が生まれた…。

（第25話につづく）

第25話

それは、今フォルたちがいる場所と、同じ場所のもの。

その場所に、息を切らせ刃が持ち手よりも長い鎌を持った翠緑碧
眼の、

フォルの想像よりも遙かに若く、それでいて記憶の底を刺激して
止まない少年、ケイがやってきた。

『ぐうつ』

ケイの悔恨を伴った辛そうな表情。

その視線の先には、血まみれのクリッターと、その血溜まりに沈
むシトリイの姿があった。

映像だとわかっていても、思わず駆け寄ろうとするフォルと、

悲鳴のような声を漏らすアリエイルの前で、緑色の残像を残して
掻き消えるケイ。

何かを光速で打ち据えるような音がして、気づけば壁際まで弾か
れているクリッター。

フォルには、ケイが何をしたのか全く見えなかった。

魔法の詠唱も、技を繰り出した構えもない。

ただ、月形に歪む鎌が一瞬だけ一直線の残光の軌跡を描いたよう

に見えたくらいか。

『大丈夫か。しっかりしたまえ！ 今オレ様の力をわけてやるぞ
っ』

そして、シトリイに駆け寄り、ケイは右手から若草色に光る球を
取り出したかと思うと、

それをシトリイの身体に押し当てる。

その魔法は、フォルも知っている。

アース・プレデターと並び、ガイアットの一族がよく使う魔法の
一つ、【ガヴ・チャージ】だ。

自身の生命力を分け与え回復させることができる魔法。

だが。

ケイのその魔法は壊れた桶から水が染み出るように、シトリイの
身体に留まることはなかった。

もう、手遅れなのだろう。

その魔法を受け容れることもできないほどに。

『ぐっ、オレ様ももっと早く来ていればこんなことにはっ
』

ケイにもそれは分かったのだろう。悔しそうに自らの手のひらに
拳を打ち付ける。

すると、その音でシトリイが側に誰かがいることに気づいたのだ

ろっ。

その誰か、ケイに何かを伝えようと、必死に口を動かしているのが分かる。

ケイは、それを見て、残さずその最後の言葉を耳に入れようと、しゃがんで口元に耳に近づけた。

『ねえ……ん……た……けて』

お姉ちゃんを、助けて。

それは確かに、そう聞こえた気がした。

シトリイは今まさに自分の命の火が消えていこうとしているのに、も関わらず、

クリッターに喰らわれ……いや、先程の光景を見る限りでは異世界に飛ばされたのだとは分かっていたが、それでも自身よりも姉のことを心配していたのだ。

「分かった、助けてやる！ だから死ぬではないぞ、待っている！」

ケイは、力強く宣言する。

だが、ケイ自身がそれを叶えることができたとしても、シトリイにはそれを待っていられる時間は最早なかった。

もう、命の火は、消えかけている。

どうすればいい？

そんなシトリイに一体何ができると言うのだろうか？

いくら英雄と謳われた男でも、それは無理難題に思えたが。

「さあ、この鎌を掴むがいい。この鎌は死に神の鎌だ。お前が来世で、その命を終える時……

その魂をオレ様が貰い受ける。この儀式は、その契約だ。

たとえ生まれ変わり、お前がオレ様のことを忘れようとも。

オレ様はお前との約束と契約を守るため、必ずお前の元に現れるだろう。

だから、覚悟して待っている！」

「……」

しかし。

ケイは、それが当たり前であるように、そんな事を言った。

シトリイは、言われるままに最後の力で、その小さな手、その甲を鎌に触れさせる。

ほんの僅かに流れるのは、シトリイの赤色の血。

契約の証。

それは、死にゆくものに対しての慰めの虚言のようにも、ありえない世迷言にも聞こえたが。

シトリーは、その契約が結ばれたのを見て。
どこか安心したように、わずかに微笑みを浮かべ……こと切れる。

覚悟して、待っている！

その言葉が、自分自身にも送られている気がして、フォルは胸が熱くなる。

実際に、そのケイの言葉は嘘ではなかったのだろう。

城の地下で見たシトリーが、今ここにいるフォル自身が、それを示している。

当然、ブラッドヤルビスも同じ。

それこそが、イシュテイルの秘密であると、フォルが本能的に理解したのがその瞬間で。

それから。

ケイは自らの意思でクリッターに喰らわれたのは、すぐのことだった。

ただ、シトリーとの約束を果たすために……。

(第26話につづく)

第26話

「兄さんっ！」

やがて映像は消えて。

無意識だったのか、そうでないのかは分からないが、呼びかけるようにそう叫んだのは、ガイアット仮面だった。

「え？」

ルビスは、その事にぎょっとなって言葉を失う。

ルビスが知っている限り、ケイをそう呼ぶのは、一人しかいなかった。

とんでもない御方になんて口を聞いてしまったんだとか、なんでこんな所にいるのかとか、色々考えたら混乱の極みに陥ってしまったルビスである。

どういうことよ！ と辺りを見回せば。

初めからそんなこと分かっていたかのような無関心さで、

ぼーっと映像の残滓から視線を外さないブラッドとフォルの姿が見える。

（あれ？ も、もしかして、ガイアット仮面さんがガイアット王

だって気づいてなかったの、ワタシだけ？)

ルビスが、その驚愕の事実を自分だけが知らなかったことに酷く落胆している。

当のガイアット仮面改め王は、自ら信じていたもの、それを失わずにすんだ喜びを滲ませつつ、口を開いた。

「やはり兄さんは兄さんだった！ アリエイルよ！ これで分かっただろう？

僕たちの心の霧は、今晴れた！

それもここにいるフォルたちのおかげだ、本当に感謝している、ありがとう」

アリエイルは、空色の瞳で頷き、そう言われたフォルは、やはり先程と同じ顔をする。

「王さま？ もうガイアット仮面の扮装は終わりですか？」

そして、そんな事を呟いた。

やはり、フォルは気がついていたらしい。

「あれ？ もしかして最初からバレてたり？」

「いえ、さすがにそこまでは。私が確信したのは王の翼を見たときです」

「フォルはほとんど初めから気づいてました。

というか仮面だけじゃフォルの目は誤魔化せないですよ」

頬をかくガイアット王に、ブラッドは淡々と、フォルはあっさり
とそんな事を言う。

困ったのは最後まで気づかなかったルビスである。

ブラッドはともかくとして、そう言ったところは抜けている感の
あるフォルが気づいていたのが驚きで、もはや自分は分かりません
でしたとは言えそももない状況だった。

「ま、全く。一国の王ともあろう方が、どうしてわざわざ変装な
んか」

だからそう言うしかないルビスであったが。

それを聞いたガイアット王は、玉座では（パールに睨まれている
から）絶対にしないような小悪魔的な笑みを浮かべて言った。

「黙ってたのはお互い様でしょう？ それにお忍びで外に出る（
世直しをする）時はこれが正装だって兄さんに言われてたからね」

なんとも胡散臭い解答である。

クリッターを呼び出す目的があつたとはいえ、これではルビス（
たち）を驚かすためだけにやったとしか思えなかった。

しかし。結果で言えば何も言わずに仕事の途中で放棄して、
混乱に乗じて抜け出してしまったのだから、文句は言えない、
怒られても仕方のないところなので、どうしようもない。

と、そんな事を思っていたからいけなかったのか。それまで笑顔だったガイアット王の表情が厳しいもの変わった。

毎日のように怒られている三騎士はともかく、王に怒られたことなど一度たりともなかったため、ルビスが恐悦至極な気持ちでいると。

それから王が口にしたのは全く違うことだった。

「くっ、やはり駄目だったか」

そして、ガイアット王がそう言った瞬間。

再び部屋をノックするような音がして、今は閉じているクリッターが落ちたはずの風穴が、うねり膨らんで弾けた。

「でいるでいるっ！」

金属の激しい磨耗と、地を這う蛞蝓が発する音が合わさったかのような不快な奇声を発し、

クリッターは中空にふわりと浮かびフォルたちの方へと向き直る。

何だか心なしに怒っているような気がして。振り返ってくるのは、底のない恐怖。

「お、王さまっ、さっきみたいになんとかしてっ」

「なんとかしてって言われてもね。さっきのは攻撃したり捕まえ

たりするためのものじゃないからな。実を言うと、私にはクリッタークラスの化け物に立ち会える力はないんだよ」

ルビスが希望に絶るようにそう言うが、

ガイアット王はそんな希望の上に絶望を上塗りするかのような台詞を吐く。

「困ったです。こんな時にフォルにとつときのヘンシン能力でもあればいいんですけど」

「……」

どうやらフォルは、自身の力により獣王に変身した記憶は残っていないらしい。

それを聞いたブラッドは再び自らの封印を解く算段をする。

フォルと違い、自らの力を解放してから戻れる気が全くしないのが痛い所だが。

それでも決意を込めて、ブラッドがこめかみに深く埋め込まれた自らの輝石に触れようとすると。

その無謀な賭けを止めるように、再び口を開いたのはガイアット王だった。

「でもね、こんな僕でも今は兄さんの代役でいる以上、君達を守る義務があるんだ。

兄さんとの約束が叶うまで、君たちにはたとえなんだろうと、触れさせないっ！」

王は、そう叫び、再び七色の魔力を立ち昇らせる。すると、その魔力は突き立てられたですサイズに一旦集まり、それから拡散されるように部屋一杯に広がって。

刹那、水槽の水を総入れ替えしたかのように世界が入れ替わる感覚が、フォルたちを襲った。

しかし、起こったのはそれくらいで。

何も異常はないと思いきや、目の前に浮かんでいたクリッターが、何故か急に、今までとは違う動きを始めたではないか。

それを一言で表すのならば、目の前にいるフォルたちをいきなり見失ってしまったかのような、そんな感覚。

「大丈夫そうかな？ とりあえず、クリッターのいる世界から僕たちだけを切り離して別の世界に運んだんだけど」

そして、ガイアット王がそんな解説をしているうちに、本当に見失ったらしい。

やがて他の何か、新たな獲物でも見つけたのか。

跳ねるようにクリッターは、部屋から出て行ってしまった。

「ふう。うまくやってくれたみたいだ。これで今度こそ、終了かな」

「ん？ 何のことですか？ 気になるです」

フォルが怪しいですと詰め寄ると、ガイアット王は少し失言したかなとばかりに頭をかく。

それから、わざと話題を逸らすように、アリエイルの方へと駆け寄り、

ケイがしたようにガヴ・チャージの詠唱を始めると……その合間を縫って口を開いた。

「これで、双方のわだかまりも解け、いい関係が築けるようになることを祈るよ、

アリエイル・ウーラ。今はまだ、その時ではないのかもしれないけれど、

いつかきつと、君の子供たちを連れてまたここに来るから。

願わくは今まで通りこの場所を守っていてほしい」

アリエイルは、その言葉を受け、わずかに翼を揺らし、優しい風を部屋に運ぶと。

ありがとう。

たった一言、そう呟いたのだった。

「何だ、しゃべれるんじゃない」

そして。

ルビスの、そんな捨て台詞を残して。

一同は、ガイアットの塔を後にするのだった……。

(第27話、

最終話？ につづく)

第27話（エピソードと言つ名のプロローグ）

それから。

フォルたちが塔の入り口まで下る頃には、外の世界は完全なオレンジ色の世界に包まれていた。

「あれ？ 入り口のところに誰かいます」

「誰か？ って、うわわわわあっ、三騎士揃い踏みじゃん。なんで！ どうしてっ、まづいよ〜」

その陽を全身に浴び、仁王立ち（フォル達からはそう見えた）しているのは、

グレイとパール、そしてユタ・フェアブリッツの三人だ。

ルビスは、王に黙って抜け出したことについて口止めしておくつもりだったのに、

最早手遅れになってしまったことに気づかされ、早くも焦っている。

「ふふ、冷静に考えれば分かること、か。王がここにいるのにその近衛が供につかないはずはないしね」

逆に、ブラッドは既に諦めてしまっているのか、達観しきった口ぶりですんな事を言う。

「ま、そういうことになるかな。実は、脅かそうと黙ってたんだけど、
私たちがクリッターから逃げるためにこの世界から剥離してる間、
クリッターをおびき寄せ誘導してもらってたんだよね。
他にも密かに色々補佐してもらってはいたけど」

そんなフォルたちの反応を見て、面白可笑しそうにそんな事を言うガイアット王。

「ひどいです。初めからばらす気満々だったんですねーっ」

間違いなく怒られる。

三人におしおきをくらってしまう。

そう言えば魂の残滓集めも最下位だし、

ついでに腹いせにルビスとブラッドの実験体やらされたらどうしよう。

なんて焦りまくってフォルがガイアット王に泣きつく。

さすがにいたたまれなくなったのか、ガイアット王は苦笑して言った。

「ま、思ってるほどのお咎めがないと思うよ。城下から出るのを黙認させたのも僕だからね。

やあやあ、ご苦労ご苦労」

そして、まるで王の威厳を感じさせない足取りで三人の元に歩み寄っていくガイアット王。

「ま、まずいですよ……」

だが、そんな気楽なガイアット王とは裏腹に、
フォルは何か重大なことに気づいたかのように引き攣った声をあげる。

「確かに、まずいね」

「既に逆鱗はいじやってるし。アハハ、し〜らないっ」と

その重大なことにブラッドもルビスも気づいていて、完全萎縮の逃げ腰である。

気づいていないのはもはやガイアット王のみで。

「お、王も、無事でなによりでござる」

「今この瞬間までだけどね〜」

引き攣り笑顔でそう言って逃げるようにその場を離れるユタとグレイに、

ガイアット王が疑問符を浮かべていると。

「コージイ？ 今日随分とお楽しみいただけただけなようですね？」

青筋浮かべた、完全無欠のエガオなパールがそこにいる。

「ち、ちよつと？ みんなの前で名前呼ぶのはなしでしょう？
な、何か怒ってる？」

「ふーん？ そう。しらばっくれるんですね。私の前で美しいっ
て褒め言葉どころか、

名前も呼ぶのも駄目、つまりはそういうことですか？」

「え？ だ、だからあれは演技だってっ。なんかすごく理不尽！
怒られるようなことなんかしてな、あ、ちよつと？ ぎいやああ
ああっ！！」

以下、しがない痴話喧嘩？のため割愛。

ちなみに、ガイアット王とパールは相方同士。

それは、ガイアットとイシュテイルという意味だけではないので
ある。

つまるところ、ガイアットの国では王より王妃のほうが立場が強
いわけであり。

二人の関係はもはや国の公然の秘密と化していた。

「いつもの光景、ですねえ」

フォルは、そんなある意味、見慣れた一幕を目にしながら、くす
りと微笑む。

見渡せばそこには大切な家族が茜色に包まれていて。

悠久の橙の中で感じるのは、何気ない日常の幸せ。

ふと、その日常に輪に混じるように。

ここにいる誰でもない、それでいて大切な人の笑い声が聴こえて

きた気がして、フォルは振り返る。

そこに見えるのは、オレンジの影落とす、それら全てを生み出した夕陽のみで。

それは気のせいかもしれないけれど。

秘密が本当の意味で秘密ではなくなつて。

きつといつか、一緒に笑える日が日常になると、そう信じて。

フォル達は、夕陽の中、家路に向けて歩き出すのだった……。

(終わり?)

第27話（エピソードと言つ名のプロローグ）（後書き）

はい、伊吹ノアです。

中編として始まったこのお話、予定通りいつもの半分くらいで完結となりました。

このお話も、本編の外伝の立ち位置にありますが、他のものとは違い、未来の話だったりします。つて、作品内に描写してたと思います。

それとは別に、このお話は、今まであまり日を置かず投稿していたこともあり、

あえて時間をかけて日を置いて投稿しました。実験的な部分もあったのですが、やはり何事も中間くらいがいいのかな、

という結論に至った次第です。

そんなわけで次作も決まっているので（今作の続きじゃないところがヒドス）、

いい感じな中庸を目指してやっていければ言いたいと思いますー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3700r/>

オレンジ

2011年7月31日23時28分発行